汝にユウキの花束を

柊柳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
汝にユウキの花束を

【Ｎコード】
Ｎ８６６３Ｔ

【作者名】
柊柳

【あらすじ】
学校で神藤祐希を知らない者はいない。
テストを受けさせれば常に成績はトップ。中でも魔法学に関しては数十年に一人の天才と謳われているほど。
運動をやらせれば全てにおいてそつなくこなすし、一度覚えたものは絶対に忘れない。瞬間記憶能力者と言う異能者が存在すると聞くが、祐希こそ正しくその異能者と呼んでしかるべきだろう。
超絶完璧王子様にして、ハーレムの主。
俺のたった一人の親友は、正しく物語の主人公に位置する人物だ

った。

けど、な。まさか、ハーレム野郎が……女って、お前。この先、どうするつもりなんだよ。

※ご指摘があったため、題名を変えさせていただきました（旧ハーレム野郎は女郎だった）

プロローグ

学校で神藤祐希（しんどうゆうき）を知らない者はいない。
テストを受けさせれば常に成績はトップ。中でも魔法学に関しては数十年に一人の逸材とまで言われている天才と謳われているほど。
運動をやらせれば全てにおいてそつなくこなすし、一度覚えたものは絶対に忘れない。瞬間記憶能力者と言う異能者が存在すると聞くが、祐希こそ正しくその異能者と呼んでしかるべきだろう。
陽光の如く燦然と煌かせる金色の髪は金メッキでも施されたかと思わんほどの美しさを見せ、左右異なる瞳が彼の容姿に拍車を掛けている。一言で例えるならば、物語上にしかいるはずのない架空の王子様。
そんな完璧超人にも関わらず、気兼ねなく接してくれるから祐希の人気は爆発的に高い。学校全ての女性が祐希のファンと言っても過言ではない。はてには教師までもが祐希の美貌にノックアウトされている始末。
だが、そんな祐希にも一つだけ弱点と言うか、落ち度と言うか、欠けているものがあった。
いやね。正直言うと、祐希にそれを欠かすのはいかがかと思うんですよ。神様は二物を与えないと言う言葉があるが、祐希に二物三物と与えているのに、どうしてあれだけ与えなかったのが不思議で仕方がない。
そのせいで、俺がどれほど苦労したのか知らないだろう。
知らないなら教えてやる。
アイツ事、神藤祐希に鈍感と言っていいほど女心を把握出来ないニブチン野郎なのだよ。
それが、どれほど俺に被害を与えたか知っているか。
知らないなら教えてやる。これで二度目だぞ、何度も言わせるなよ。

祐希宛のラブレターを毎日最低５０通は受け取るのは序の口。祐希と回し飲みしようものなら、必ず刃物の雨が降り注ぎ、俺を理由に誘いを断られた日には容赦なく魔法をぶつけて来る。どうだ、これだけでも目から汗が流れるだろう。

そして、運が良いのか悪いのか知らないが、そんな祐希と必ずと言っていいほど比べられる。成績にしろ、運動にしろだ。

どんなに頑張っても一歩二歩先に祐希がいる。それを見て、両親は祐希を見習って頑張ってみろと言って来る。

努力が報われた日などない。

努力をする事に価値がある、と誰かが言ったが、成果が出なくては意味を成さない。

祐希と縁を切る事が出来たなら、きっと俺の人生も劇的とは言わなくても、多少は変化しただろう。

けど、祐希と縁を切ろうとは思えないし、そんな風に考えた事はない。

数少ない俺の友人で親友だ。アイツが困ったら全力で力になってやりたい。

そんな事は絶対にありえない――と、思ったんだが。

まさか、あんな事になろうとは夢にも思ってはいなかったさ。

第1話：神藤祐希

下駄箱を開けば案の定、入り切れないほどのラブレターが入っていた。
「……またか」
それを俺は丁寧に回収して確認していく。
簡素なもの、派手に装飾したものと色々とあるが……うん。全て宛名が「神藤祐希様へ」と書かれていた。
「今日は30通か。少ないほうで助かったな」
両手に一杯のラブレターを数えている所、背中越しから聞き入った声が聞えてくる。
そんな呆れる様に俺に言う奴など一人しかいない。
「おはよう、真吾。今日は珍しく遅刻しなかったな」
「おっす、坂本。今日もお勤めご苦労様」
ぽん、と俺の肩を叩く真吾。
遠山真吾。俺の数少ない友人の一人。現世に蘇った侍忍者なんて呼ばれ、あの祐希に負けず劣らずの身体能力の高さを誇っている。
「どうにかしてくれよ。真吾の情報操作力でどうにか出来ないか？」
「無理だろうな。あの天然フラグ造成野郎殿は、どんなに俺様の能力が高かろうと強制キャンセルされるだろうな。あいつはそう言う奴だろ？」
「……分かってはいるけどさ。分かってはいるんだよ」
重要なので二度言ってみた。
「まっ、アイツの男友達はお前しかいないんだろ？　だったら当然の帰結さ」
「俺、アイツの友達やめた方がいいかな？」
「そうなったらそうなったで、二次三次災害が酷いだろうな」
楽しそうに笑うな、他人事だと思って。
あの野郎。男の癖にちょっと反論しただけで直ぐに涙目になるか

らな。あれは反則だよな。
両目に涙を溜めて泣くのを我慢する姿なんて幼い子供そのものだし、何よりその姿を見て母性本能を全力でくすぐられた女子生徒達からの報復が怖い。
ちょっと反論しただけでこれだ。縁を切ったならば……考えただけで怖ろしい。
「……まぁ、何か困った事があったらさ、俺に相談しろよな。少しは力になってやるからさ」
肩を落とし、落ち込む俺に同情してくれたのだろう。真吾らしからぬ慰めの言葉を受けた俺は素直に礼を言う。
そんな俺達二人の所へ駆け出して来る者がいた。
「「むっ」」
俺と真吾、二人して第六感こと直感が警告する。
「ゆうき～、しんご～！　二人ともおはよう～～」
あの呑気そうな声は……。
俺は思わず現在の時間を確認する。
今の時刻は八時五分。これはどう言うことだ。
「おい、坂本勇気」
「皆まで言うな、分かってる。あと、フルネームで呼ぶな」
真吾が何を言いたいか重々承知している。けど、その答えは俺も持ち合わせていないんだよ。
「だったら、どうしてアイツが登校してくる。アイツはいつも八時十五分に来るだろう」
「そんな事、俺だって知っているさ。故にアイツが早く来た理由なんて知るかボケ。って、そんな事をしている暇はないぞ、真吾！」
「あぁ、分かって――」
「二人ともおはよう」
「「なっ」」

いつの間にか奴は俺達の傍にいた。
おい、ちょっと待て。お前、ついさっきまで数十メートル先にいただろうが。
真吾も同じ気持ちなのか、さっきまでいたはずの場所と、直ぐ脇にいる祐希を目を丸くしてみていた。
「二人とも早いね、いつもこんな時間から登校しているの？」
そんな俺達の気持ちなど知る由もなく会話を続ける声を聞いて、俺と真吾はやっと我に返った。
「おっす、祐希。俺はちょっとした理由でな、今日は早く来たんだよ」
「そうなんだ。真吾君も？」
「いや。今日はたまたま早かった、それだけさ」
「ふ～ん、そうなんだ。いつもこの時間ぐらいに二人が登校するなら、ボクも登校時間を早めようと思ったのに」
いや、それはやめてくれ。毎日毎日胃が痛くなる思いをしたくはない。
胃が痛くなるで思い出したが……。
「そう言えば、今日は連れがいないんだな？」
真吾も同じ事を考えていたのか、辺りを見渡しながら祐希にいった。
俺も同じ様に辺りを模索するが、遠くから熱い視線を向けている女子生徒はいるものの、俺の胃を苦しめる張本人達の姿はなかった。
「それって雛ちゃんと琴ちゃんことかな？　それとも、ひまちゃんと茜ちゃんかな？」
「どっちかと言うと全員だ、祐希。どうしたんだ、お前の恋人達は。……はっ！？　まさかお前、ついにあの四人を振ったのか！？」
だとしたら、祝杯を挙げなくてはいけない。
「え、え？　何のこと、勇気」
「だから、あの四人がいない理由だよ。祐希、ついにあの四人の気持ちを察して、決着をつけたんだよな？」

柄でもなく興奮してしていたのだろう。祐希の両肩を乱暴に掴み、歓喜の声を上げる俺を見て、今度は祐希が目を丸くさせている。
「えと、その。何を勘違いしているか知らないけど、取り合えず離してくれないかな？」
遠慮がちに言う祐希。どうやら両肩を掴む力が強かったのかもしれない。何やら我慢する表情を見せる祐希を見て、やっとの事で意識が正常化した俺は慌てて掴んでいた両手を離す。
「悪い。柄にもなくはしゃいでしまったようだ」
「う、うん。別にいいよ。ただ、ちょっとびっくりしただけだから」
そう言ってはいるがやっぱり痛かったんだろうか。抱きしめるように両肩を摩りながら俯く。
マズッタかな。……うん、マズッタよな。
祐希が俯くと同時に四方八方から殺気が漂ってくる。
「おい、坂本。どうするんだ、これ？」
「バカ。これって指差すな」
ほら、見ろ。殺気が膨れ上がった。
目線で「すまない」と謝罪する真吾を無視して、俺は祐希に話しかける。
「それで結局の所、自称祐希の恋人達、雛菊と琴音、向日葵と茜はどうしたんだ？」
ぱっと祐希の顔が上がる。
「こ、恋人って！　彼女達はそんなじゃないよ」
「いや、顔を赤くして反論されても説得力ないんだが」
「だから、違うんだよ勇気！」
強く声を発しながら祐希が詰め寄ってくる。
「ばっ、お前、近い近い」
「勇気はいつもそうだ。ボクがあれほど彼女達とは何でもないって言っているのに」
「それには反論の余地はあるが、取り合えず近い。後、お前が睨んでも全然怖くないからな」

「なにおぅ。前々から思っていたけど、勇気。キミはボクをもう少し男らしく扱うべきだ」
いや、男らしくって言われてもな。
「そもそも、最近キミはボクが一緒に帰ろうと誘っても「わりぃ。先約があるから無理」と言ってさっさと帰るし、鍛錬を誘っても「今、秘密特訓中だから人には見せられないんだ」と言ってさっさと消えるし。キミ！　明らかにボクの事を避けているよね」
避けられているって気付いていたんだ。
てか、俺の声真似上手いですね。
「今日はキミの素行調査をするため、四人には動向を諦めてもらったんだ」
「なっ！？」
なんだと。
俺の素行調査？
「ほぅ。坂本の素行調査とは、中々楽しそうな事をするな」
そこ！　話しに食いつくな、バカ真吾。
冷静に。クールだ、クールになれ、俺。
なに、たかが相手は祐希ただ一人のみ。
心眼の雛菊や読心術者の琴音はここにいないから、俺の嘘を見抜けるスペックは相手にはない。
吸収の向日葵と散歩の茜もいないから、逃げようと思えば逃げられる。
楽勝じゃないか。今の祐希を相手にして負ける要素一つないじゃない。
やばい。これは初めて祐希に勝利するフラグ来たかこれ。
「……で、調査って何を調べて痛んだよ」
って、滅茶苦茶声が震えているじゃないか。
祐希は「ふ、ふん」と得意げな顔を浮かべ、胸ポケットからメモ帳を取り出す。
「基本的には勇気の一日の始まりから終わりまで。たとえば、昨日

の起床時間は5時14分34秒だったとか」
「ちょっ！」
ちょっとまて、お前さん。何故に俺の起きた時刻を知っているんだよ。
いくら小学以来からの友人であるからとは言え、俺とお前の家って結構離れていたはずだぞ。
「朝食はチョココロネ一つ。意外に小食だよね、それで朝ごはん足りるの？」
「大きなお世話だ。そんな事よりもお前、そんな情報をどうやって得た！？」
「勇気。ボクを誰だと思っているの？　ボクはキミの親友だよ」
「は？　それと今の話しに何の関係があるんだよ」
「親友の行動は逐一知っていたいじゃないか。そんな当たり前な事も分からないのか？」
「……真吾」
俺の言いたい事が分かったのか、真吾は肩を竦めながら首を横に振る。
目が「やめておけ」と言っているが、最早この能天気バカに対する耐久性はゼロだ。
「祐希、てめぇ」
いい加減にしろよな。と、そう言おうとした瞬間――地響きが俺らを襲う。
その地響きの正体をいち早く察した真吾は慌てて俺の肩を掴む。
「坂本、今はまずい！　撤退しろ」
何を今さら。俺は今日こそこのバカにガツンと言うんだ。
肩を掴んでいた手を払い、祐希に詰め寄った瞬間――奴らが現れる。

第2話：槍琴音・槍茜

一瞬の出来事だった。
俺が祐希に詰め寄った瞬間、俺と祐希の間を何かが走り抜ける。
「チッ」
聞えてくる舌打ち。まるで、狙いが外れたと言いたげな不機嫌声に俺は戦慄を覚えた。
だが、ここで振り向くわけにはいかない。何せこのパターンは既に記憶済み。
「坂本っ！」
真吾が吼えるように言う。その前に俺は上体を大きく反らす。
数秒後、俺の頭部にあった所を走り抜ける何か。一瞬だったから断定出来ないがそれは球体の形状をしていた。
……って、今回は硬式かよ。だんだんエスカレートしていないか。
チラッと尻目で強襲してきた正体を確認し、第三第四の強襲を回避する為に、そのまま跳躍。

――ボッ。

狙い済ましたかのように俺が立っていた地が燃える。燃えると言うよりも燃え上がると言う表現が適切かもしれない。
正直な所、あの炎を浴びたら普通死ぬんじゃないか。
咄嗟の如くバク転で回避したものの、一歩遅かったらバーベキューもいい所だ。
「チッ。最近、回避行動にキレが出てきたわね、坂本勇気」
「またハズレた！　もうっ！　どうして琴音の読みが外れるのよ！　信じられない」
不機嫌声の二重奏が空から聞えてくる。見なくても分かる。
あからさまに舌打ちをする人間なんて俺には一人しか思い浮かば

ないし、何より人前で隠す事無く舌打ちをする人間など彼女以外に見たことない。
憤慨するもう一人の正体など一人称が自分の名前だしな。考える必要すらないってものよ。
「甘いな、檜姉妹共。毎日毎日襲われれば嫌でも人は進化するんだよ！　その程度の強襲など赤子の手を捻るも当然。アスファルトの胸を洗って出直して来な！」
「……あっ、今、何かが切れる音がしたぞ」
「毎回思うけど、勇気は茜ちゃんと琴ちゃんにいつも突っかかるよね。こう言うのなんて言うの真吾君？　エム？」
「いや、俺に聞くなよ神藤」
祐希。今度、お前とはゆっくりと話し合う必要性があるようだな。
元はと言えば、あの二人が毎日毎日突っかかるのはお前の所為なんだぞ、お前の所為。
小学以来からの付き合いと言うだけで、毎日毎日こんな茶番劇をやらされている俺の身にもなってみろ。
お蔭様で体重が三キロ程減り、脂肪率が１％を切ったわ、どうだ凄いだろ。
「胸胸って、女の子の価値は胸だけで決まらないの！　それに琴音の胸は背徳感を抱かせてくれます」
いや、ダメだろそれ。
「知らないのか、檜琴音。最近幼児体型は色々と法律が厳しいんだぞ？　お前、祐希を警察送りにしたいのか」
「な、なっ！　琴音は幼児体型じゃないの！　ただただ、世間一般の女の子よりも発育が遅いだけ。ただそれだけなの！」
それを世間一般的に幼児体型と言うんだよ。
檜琴音。祐希ハーレムズの一人にして、永遠の小学生の称号を持つロリっ子。
ランドセルを背負わせば今でも小学校に通わせてもばれないほど背丈は短く、本人が自称するだけ合って凹凸のない幼児体型。

フリルをふんだんに使用した改造制服と頭の蝶リボンが特徴的な女の子。噂によると、夜出歩くと必ずと言って良いほど御巡りさんのお世話になるそうだ。あれで俺と祐希の同年代なのだから不思議だ。

「姉さん、落ち着いてください。ばい菌の口車に合わせないでください。口で姉さんが勝てる訳ないんですから」

憤慨する檜姉を嗜める檜妹こと檜茜。

姉の琴音と正反対でモデル体型。ただ悲しい事に胸は姉と同じまな板胸。足に異常な性癖を持つ男性人からよくよく話題に上がるだけ合って、スカートから伸びる足の細さは異常だった。ちょっと力を入れたら折れるんじゃないかって程細い。

姉とは違って至って冷静を保っているように見えるが、姉以上に胸の大きさにコンプレックスを抱いているお前だ。もっと、焚きつけたらどうなるやら。

「勇気。二人が幾等可愛いからって、少し苛め過ぎだよ。女の子は繊細なんだ。そこの所を少しは理解しないとダメだよ」

舌戦に持ち込もうと追撃を図っていた俺を注意する祐希。

腰に手を当てて頬を膨らませる仕草は女の子っぽい。耐性のある俺と真吾は大丈夫なのだが、耐性のない男共はこれをきっかけにそっちの道へ走って行く者もいると聞く。なんて傍迷惑な破壊力を持っているのだ。その所為で同じ男に襲われた経験を持つ我が親友は、沈黙を肯定と取ったのか「良し」と満足そうに頷き反転。

「二人ともごめんね。けど、二人も悪いんだよ。幾等かまって欲しいからって、そんな事をしたらいつか勇気に嫌われるぞ」

ニコ。ポッ。

祐希の微笑みスマイルが檜姉妹に炸裂。

二人は祐希のスマイルを受け、顔面を真っ赤に染め上げる。

今日も絶好調だな、祐希の微笑みスマイル・ニコポ・コンボの威力は。

祐希が微笑むとどんな女性でも必ず頬を赤く染め上げる。俺の記

憶が正しければ、祐希のスマイルを受けて平然としていた老若男女はいないはず。無論、俺もこのスマイルに勝ったためしがない。
そんな破壊力抜群のスマイルをしながら、こいつ途轍もなく怖ろしい言葉を言わなかったか。
「うん。ちょっと待とうか、祐希。お前、物凄く何か勘違いしていると思うぞ」
「へ？　何が？」
何がって……。
「そうですよ、祐希先輩。先輩は物凄く誤解しています」
「そうそう！　琴音はこんな歩くセクハラ魔人に好意を抱いた事なんて一秒もないよ！」
珍しく祐希に反論する檜姉妹。
不愉快、と顔に書かれているのが手に取るように分かるな。
姉の琴音なんて大きく頬を膨らませているしな。完全なおこちゃまだな、あれは。
一方、俺達から反論を受けた祐希は、自分の失言に気付いていない様子。
目を丸くしている所からしてみて「ボク、何か変なこと言った？」と自問自答しているところだろう。
「お前はさ、もう少し自分の立ち位置を理解すべきだよ。流石に檜姉妹や委員長、向日葵さんに失礼だよ」
そして、早く彼女を作れ。主に俺の平穏の為に。
「あら。貴方に心配されるなんて、この私も焼きが回ったものね」
……はぁ、結局こうなるのか。

第3話：天野向日葵

話しは変わるが、俺こと坂本勇気は神藤祐希と小学時代からの仲である。

小学時代は良く一緒に登下校したり、道草をして遊んだ記憶は俺の人生の中で楽しい思い出の一つとされている。

まあ、その時から天才の名を欲しいままに生きてきた祐希に何度も劣等感を抱いたのも今では良き思い出と言えよう。

しかし、中学時代から祐希と登下校した記憶は殆どない。いや、訂正しよう。

ほとんど記憶がない、と言うよりも俺が祐希と一緒に帰るのを拒んでいただけだ。

小学校高学年の頃からだろうか、祐希があらゆる女性からアプローチを受け始めるようになったのは。

同時に、俺が祐希と登下校するたびに嫌がらせを受け始めたのは。

なにせ、祐希は何をやっても完璧にこなすにもかかわらず、親友である俺は凡人もいいところ。

成績は祐希に教わらなければ今の学園に受かったか怪しい。中でも魔法に関する能力は赤ん坊に劣るらしい。

そんな情報を何処かしらか手に入れたのだろうか、それを知った周囲は俺の排除に掛かったのは今でも鮮明に覚えている。

そして、それは今も終わっていないと追記しておこうか。

俺が祐希と親友でいる間、嫉妬に狂った女性達の殺意を真っ向に浴びなくてはいけないらしい。

そう。このように声を掛けられた瞬間、火の玉が飛んでくるなんて俺にとっては日常茶飯事なのだ。

……正直、そんな日常はいらないと声を大にして言いたいけどな。

「流石ですわね。今のタイミングでも初級の魔法とは言え避けますか。伊達にゆうくんの親友をやっていないですわね」

「お褒めに預かり恐悦至極……とでも言うと思ったか！　先輩と言えど、やっていい事と悪い事があるだろ。なぁ、天野先輩よ」
「もちろん、これはやっていい行為よ。私はゆうくんへ近寄る悪い虫を狩っているだけだわ」
　悪い虫って、俺の事かよ。
「ゆうくんも気をつけないとダメよ。ゆうくんを虎視眈々と狙っている悪い虫なんて山のようにいるんだから」
　それはどっちの意味だ、と聞くのは野暮か。
　祐希を虎視眈々と狙っている奴なんて山のようにいるのは確かだしな、良い意味でも悪い意味でも。
　だが、その悪い虫の中に俺が入っているのだけは反論させていただく。
「どっちかと言うと、俺よりも天野先輩の方が悪い虫と言うべきじゃないか？　第一、生徒会の仕事はどうしたんです」
「何を言い出すかと思えば……。私は天野向日葵よ。学校の仕事など眠っていても完納日に間に合わせて見せるわ」
　不敵な笑みを浮かばす天野向日葵に俺は「そうですか」と話しを切る。
　天野向日葵。我が学園の生徒会副会長。成績優秀文武両道。魔法学全国一位を治めるスーパー女子高生。
　生徒会専用の赤い制服を着る事が許されている副会長様は、俺に殺意を飛ばし終えた満足したのか、祐希の方へ振り向く。
「ゆうくん。今日の放課後暇かな？」
「放課後ですか？　これと言って予定は」
　ない、と言おうとしたのだろう。
　だけど、祐希が言うよりも早く祐希の両脇を占めた者達が先に答えた。
「ダメです」
「そうですよ、副会長さん。そう言うの公私混同と言うのよ」
「え～と」

両腕を檜姉妹に取られ困惑する祐希から視線が来る。
助勢を求めているのだろうが、あいにく俺にはどうにもならない事項だ。
檜姉妹の反対の言葉に天野先輩は笑みを絶やさず言う。
「あら、琴音ちゃん、茜ちゃん。これは貴方達にも関係する事なのよ。もちろん、この場から逃げ出そうとしている真吾君よ」
ぎく、と聞えそうなほど体全体を跳ね上がらせて真吾が反応する。
「なぁ、副会長殿。やっぱり出ないとダメか？」
「ダメです」
僅かな希望すらも一蹴する返しの言葉に真吾の肩が落ちる。
話しは見えないが、俺にとって関係ない話しだろう。下手に「何が？」と聞いて巻き込まれるのは関の山だ。触らぬ神に祟りなしと言うし、この場は静観しておこう。
「俺、神藤と闘えるの楽しみにしていたんだけどな」
「何か言いました、真吾君？」
「イエ、何もです。サー」
真吾の独り言で何となく察しがついた。そうか、そろそろそんな時期になるんだっけか。
「もちろん、雛菊ちゃんにも話しは通しているわ。ふふ、今回は面白い所までいけると思うのよ」
不敵な笑みを浮かばせる我らが副会長殿こと天野向日葵。
艶やかな黒髪を腰元まで伸ばし、佇む姿は一言で例えると絵に描いたような大和撫子。立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花の言葉が一番適切な表現だと思うのが彼女だと思う。
だが、それはあくまで見た目のみ。中身はどんなマゾヒストもビックリするようなサディストである。
祐希のときだけはマゾヒストになる傾向が強いが。
今も口元を隠して笑う姿は絵に描いたような美人の微笑みと言えなくもないが、頭の中では何を考えている事やら。
副会長に秘密を握られてしまうと真吾のように隷属化させられて

しまうので、俺にとっては最大危険人物である。
「あぁ、もうそんな時期になるんですか。……勇気。いい機会だから、ボクと一緒に鍛錬なんかどうだい？」
と、思案顔を浮かばせたかと思うと、何の前触れもなく祐希が言ってくる。
そのお誘いは大変魅力的だ。色々と着眼点が俺とは違う祐希は、常に俺には考えられない意見を述べてくれる。
天才の名を欲しいままにしてきただけあって、その意見は俺の魔法のレパートリーを広げてくれるのだ。
けど、この誘いは断らないといけない。
「悪いな、祐希。誘いは嬉しいが、しばらく秘密の特訓を続けたいんでな」
「また？　さっきも言ったけど、最近付き合いが悪いと思うよ。少しぐらい勇気は親友の頼みを聞いても罰は当たらないと思うけどな」
肩を落す祐希。
最近、鍛錬続きだし、祐希の誘いに乗ってもよかったのだが……。
「ゆうくんゆうくん。坂本君がダメになったから代わりにお姉さんと一緒に鍛錬しない？　私、こう見えても寝技が得意なのよ」
学校で何を言っているのやら、この副会長様は。
何気に恥かしかったのか、頬を赤らめているし……狙ってやったのか。そうであったら怖ろしいな。
だが、その意味ありな発言も祐希には利かないようだな。小首を傾げて「魔法戦に寝技？」って不思議そうな顔をしているし。
「ダメです。祐と一緒に鍛錬するのは私って決まっているんだから」
「姉さん、先輩のご意思を無視した発言は控えたほうが良いですよ。……先輩、最近自分の魔法に何らかのアレンジを加えたいと思っていたんですが、何か良いアイデアはありませんか？」
姉をたしなめつつ、理由をつけて誘うとする妹もいい性格しているな。
これを機に誰か一人に特定出来ないものか。……それとなく言っ

てみるかな。
「代表戦も近いことだしな。祐希、皆と一緒に鍛錬をしたらどうだ？　ちょうどここに、雛菊さんを除いて、全てのメンバーがいる事だしな」
俺の発言と同時に女性人の視線が集まる。三人は小さく拳を作り親指を立てていた。
内心、グッジョブとでも言っているのだろうか。
「それだったら勇気もやろうよ。勇気の戦術はボクも見習いたい所が多いしさ」
「俺の戦術は基本奇襲だ。お前のように正々堂々をモットーとした戦い方には合わないよ」
「そうだけどさ。……あっ、ほら。最近、奈々が寂しがっていたしさ。久々に顔を出してあげたらどう？」
「今思いついた感がかなり臭うんだが。それに師匠とはたまにお会いしているから問題ない」
「えっ！　いつ何処で！？」
「そんなに驚くところか、今の？　師匠とは週に一度お会いしている約束になっているのはお前だって知っていたんじゃないのか？」
「知らなかったよ。って事はなに？　勇気は週に一回、必ずボクの家に行っている訳？」
何を当たり前な事を。師匠はお前の家のお抱えメイドさんだろうが。お前の家に行かない限り師匠にお会いできないのだから、その質問は愚問のいいところだぞ。
「……そうか、そうだったんだ。フフフ、奈々め。今日帰ったらただで済まさないぞ」
「聞えているぞ。小声で何怖ろしい事を言っているんだよ。てか、それはお前のキャラに合わないから止めた方が良いぞ。それに、お前が師匠に何か出来る訳ないだろ？」
押し黙る祐希。事実なだけに祐希は何も言い返しては来ない。
最もあの師匠に何か出来るんだったら、是非とも見せて欲しいも

のだ。
「そろそろ、お開きにしないか？」
ふと、真吾が自前の腕時計を指差しながら言う。
俺達全員自前の腕時計に目をやり、思った以上に時間が進んでいる事に気付いた。
「少々話しが長くなったね」
「だな。……そう言えば、雛菊さんは今日は来なかったんだな」
おかしい日もあるものだな。いつもはいの一番に祐希に会いに来るのにな。
「ひなちゃんなら部活だよ」
「部活？　映画研究部のか？」
「良く覚えていたね、勇気」
「毎日毎日お前が入部を誘われているのを見聞きしたら、嫌でも覚えるさ」
「なんでもさ。誘いたい人物がいるみたいで、今日は朝からその人を誘っているみたいなんだよ」
ほお。祐希を放っておいて他の人間の所に行くなど、今までの雛菊さんの行動にあったかな。
それだけ優秀な人材を発見したのだろうか。ふむ、面白そうだな。
「祐希、今からこっそりと雛菊さんが惚れた人材様を見物しに行かないか？」
「珍しい事もあるもんだね。どう言う風の吹き回しだい」
「そう言うなって。たまには付き合え、と言ったのはそっちだろ？
久々に仲良く行こうじゃないか」
有無も言わせず手を取り、無理やり引っ張り出す。
てか、こいつ手が細いな。
「勝手にゆうくんを連れて行かないでちょうだい」
「そうよ、坂本勇気！　坂本勇気の癖に生意気よ」
「と、言うことで私達も同伴します。問題ありませんよね」
「……何を当たり前な事を。お前達も来るんだろ？　俺一人で雛菊

さんに勝てるわけないだろ」
不平不満を呟く副会長と檜姉妹。
悪いが、お前達が「行かない」と言う選択肢は皆無だ。
俺一人で雛菊さんを止める事なんて出来ないんだからな。
そんな何気ない一言に副会長と檜姉妹は「それはそうだね」と同意してくれる。
「さて、真吾。お前はどうする？」
「俺は興味ないから先に教室に行くよ」
「そうか。それじゃあまたな」
教室へ続く階段当たりで真吾と別れ、俺達は普段映画研究部の部室へ向かうのだった。

第４話：いつもの風景・三割減

俺にとって神藤祐希のハーレムと説くと真っ先に浮かぶ人物が水樹雛菊であったりする。

何せ他の三人と比べると彼女は中学からのハーレム要員だからだ。つまり年期が違う。

最も、中学時代の祐希スキ達が同じ高校にならなかったぐらいで熱が冷めたとも思えないから、その点ではなんとも言えないか。

そんな雛菊さんが朝から祐希の所に来ないのは珍しいを通り越して、ある意味不気味なのだ。

中学時代から祐希の傍から離れたのは部活で忙しい時か、本当に抜け出せない用事があったときぐらいだったな。

だからこそ興味があったりするんだよな。あの雛菊さんが一時的にでも祐希よりも他の人間を選んだ事が。

さて、一体どんな人物なのやら。

「この時間帯だと、雛菊さんはどの辺りにいるか分かるか？」

「勇気。そんなのボクに聞かれても分かる訳ないじゃないか」

話しを振られた祐希は苦笑しながら言い返す。

分かる訳ないと言いながら、その足取りに迷いはないのだが、その辺に突っ込みを入れたらきっと煩いんだろうな。

主に祐希の脇を固めている人達が。

「分からないの、坂本。祐希君は魔力の波長を辿って向かっているだけだよ」

「魔力の波長って……。確か人間の魔力は必ずと言っていいほど固有的な波長を持っているってあれか？　魔力の波長を識別して変装すらも見分けられるって奴」

確かあれって、人間の演算能力では見分けるのは難しいって話じゃなかったか。

さりげなく祐希の右脇を占領している檜姉こと琴音が言い続ける。物凄く俺をバカにしたような顔つきを作って。
「坂本の考えている通り、確かに人間の演算能力では難しいかも知れないね。けど、あくまで難しいだけ。だから、祐希君は学園きっての天才って言われているのよ」
「祐希が天才と言う点は素直に頷くが……。その前に、人の考えている事を読むのやめてくれないか？」
「失礼ね。坂本の考えている事ぐらい魔法を使わなくたって分かるわよ。あんたの考えている事って直ぐに顔に出るからね」
……俺ってそんなに顔に出るタイプだったのか。
心の声を読む事が出来る檜姉の言葉が本当ならば物凄くショックなのだが。
檜姉が魔法、読心術を使っていないって、俺には証言できないからな。
そんな俺達のやり取りを見て、祐希がクスクス笑いながら言う。
「勇気。心配しなくても顔には出ていなかったよ。今のは琴ちゃんが読心術を使って読んだんだよ」
「あっ、やっぱり？」
どうやって魔法を使ったのかどうか見分けたのか知らないが、祐希が言うならば本当なのだろう。
ネタ晴らしをされた檜姉は若干頬を膨らませて講義の声を上げる。
「祐希君っていつも坂本のフォローばかりするよね。ちょっとずるいよ」
「えっ？　そうかな」
「そうよ。そうだよね、茜」
姉に同意を求められ、素直に頷く檜妹。
「そうですね。祐希先輩は常に坂本先輩の肩を持っている気がします」
「そうなのよね。そのおかげで、ゆうくんと坂本勇気のＢＬ本なんかも良く出回る始末だし」

追い討ちをかけるように副会長が言う。
しかし、俺と祐希のＢＬ本って。たまに俺と祐希が一緒にいると黄色い声が上がると思ったが、今思い出してみれば祐希を見て上げた訳じゃないのかも知れないな。
そう言う女子の大半がカバーをつけた雑誌を持っていたからな。Ａ３サイズの雑誌にカバーをつけるなんて不思議に思ったが、聞けば納得だ。
「ＢＬ本？」
どうやらその単語に聞き覚えがないらしいのか、当の本人である祐希が首をかしげている。
「主に男と男を絡ませて、女性が悦になる……簡単に言うと女版のエロ本だな」
「エ、エロ本！？」
「って、何素っ頓狂な声を上げているんだよ、祐希。お前だってエロ本の一冊か二冊見ているだろ？」
「い、いや。ボクはそう言うのはちょっと」
「へぇ。そうかそうか。お前はビデオかネット派か」
エロ本だと隠し場所に困るからな。その点、ビデオやネットは上手く活用すれば幾等でもロック出来るからな。
しかし、祐希ほどの男が見るエロ物か。……やべぇ。物凄く興味があるんだが。
「坂本勇気。時と場所を考えたら？　こんな公な場所でよくそんな話しを」
「おや？　そんな優等生発言をしていいと？　副会長ともあろうお方がこんな美味しい情報源を逃すと？」
ぐっ、と言葉を詰まらせた。やっぱり、内心では滅茶苦茶気になったんだろうな。
俺は視線の矛先を檜姉に向ける。
「今の会話で祐希の心の内は読めたか？　もし読めたら是非とも教えて欲しいものだな」

「ななっ！　坂本君、それはセクハラよ！　こんな所で言える訳……って読めなかったら分かる訳ないじゃん」
読めなかったってことは読もうとはしたんだな。
「ちっ、使えないな。何のための読心術だよ。こう言う時に使えてこそ初めて役に立つと言うのに」
「……変態」
「おい、檜妹。小声でも充分聞えたからな。てか、お前もいい子ぶりやがって。知りたくないのか？　男のエロ本とは所謂そいつのお気に入りと言う事だぞ」
その言葉に檜妹の背中に雷が落ちたように見えた。
「そ、それは本当ですか？　嘘を言ったら正気しませんよ」
「おっ？　いい食いつきぶりだな、檜妹。本当だから聞いて見ろよ、本人に」
俺の言葉が言い終わるよりも早く、檜妹の視線が、いや三人の視線が祐希へと注がれる。
「な、何かな？」
無言の訴えに祐希の額から汗が流れ始める。
きっと、無言の圧力には「どうなんですか？」と言う意が込められているのだろう。
当然、祐希はそんな真相を答える事が出来る訳なく、
「ごめん」
一言誤って指を鳴らす。
パチン、と鳴った直後、三人の瞳から一瞬だけ光彩が消えるが直ぐに正気に戻る。
「……お前、自分が不利になると直ぐに忘却魔法を使うのってずるくないか？」
「だ、誰がさせたと思っているんだよ。そんなにボクを苛めて楽しいのか。これ以上続けると本気で泣くよ、ボクは！」
「って、既に涙目になっているじゃないか。それに、あれぐらいの受け応えぐらいしてやっても罰は当たらないぞ」

「うるさいうるさい。勇気のバカ、勇気の変態。勇気の色情魔」
「えぇい！　女みたいにピーピー喚きやがって。少しぐらい男らしく答えてみたらどうだ！」
少しぐらい情報を与えてやらないと、お前を攻略するなんて不可能だろ。
全てはお前のためなんだ。そんな友人のささやかな気配りに何故気付かない。
祐希が喚く度に周囲の野次馬が徐々に増えてくる。祐希が怒声を上げるのは珍しいのだろう。
口論する度に周囲の視線が集まり、殺気に満ちた視線が俺に集まりだす。
「何をやっているのかしら、二人とも」
そんな野次馬の中から、聞き入った声が飛んできた。

第5話：水樹雛菊

「何をやっているのかしら、二人とも」
野次馬の中から、聞き入った声が飛んで来る。俺達は口論するのを止め、声のした方へ視線を向けた。
視線の先には腰に手を置き、呆れ顔浮かばす祐希スキの一人。
「おはよう、雛ちゃん。これにはちょっと色々と訳があってね」
「ふ～ん、色々と訳があってね。大方、また勇気がダーリンを苛めたんでしょ？　うちのダーリンが可愛いからってそっちの道に走らないでよね」
「失敬な。いくら祐希がそこら辺の女子よりも可愛いからって、そんな気持ちになる訳ないだろ」
言った傍から頬を赤くするな祐希。
そんな反応を見せるからこの学園に存在する全腐女子の餌食にさせられるんだぞ。
「まぁ、可愛いと言うのは同意するわね。ほんと、マイダーリンは罪作りな男よね。なに？　わざわざ私に会いに来てくれたのかな？」
「う、うん。実はそうなんだ」
「え？」
物凄く意外そうな顔をする雛菊さん。
冗談交じりの言葉が事実だと分かって、見る見るうちに顔を赤くする。
「祐希が言った言葉は雛菊さんが期待する理由とは違うぞ」
「わ、分かっているわよ、そんな事」
流石は年期が違うだけあって、正気に戻るのも、自分が勘違いしているのに気付くのも早いな。
これが檜姉妹や副会長だと勘違いした途端、帰ってくるまで一時間は必要になるからな。もう少し、四人には祐希の耐性を上げてもらわなくては。

「それで？　わざわざ私に会いに来た理由は何？」
「それは俺が言おう。最近、熱心に勧誘している人物がいるそうだな」
「熱心にって……。あぁ、夢野さんの事ね？」
「そうそう。その彼女に興味があって、野次馬根性で見に来たんだよ」
「へぇ。勇気は夢野さんみたいな子がタイプだったわけ？」
「いや。あの雛菊さんが一時的でも祐希よりも優先度を上げた人物に多大なる興味を持っただけだ」
「あ、なるほど。確かに私はダーリンラブだしね。勇気が興味を持つのも分からなくはないね」
「だろ？　さすが、親友の恋人最有力候補者だけあるな。話しが早くて助かる」
雛菊さんと話しをするのは楽で言いや。敵に回すと怖いが、それ以外では優しい女の子だしな。
こんな子に慕われるなんて、祐希も本当に罪作りな男……って、その本人がさっきから一言も発言していなかった。
思い出したかの用に祐希を見やると、目を細くして「面白くない」と言いたげな顔をしていた。
「どうしたんだ、祐希？」
「いや。何か二人とも楽しそうだなって」
は？
……あぁ、なるほどね。
俺と雛菊さんが楽しそうに話しているように見えて、そんな顔をしているのか。
はは。何だかんだ言ってこいつも男なんだな。ちょっと安心したよ。
俺は、祐希の肩に手を置く。
「お前も嫉妬するんだな。親友として嬉しく思うぞ」
「あら？　あらあらら？　ダーリン。私と勇気が楽しそうに話して

いるのを見て嫉妬してくれたの？　やばい、勇気。滅茶苦茶嬉しいんだけど」
だろうな。今の雛菊さんの笑顔、滅茶苦茶輝いているもの。
俺の言葉の意味にようやく気付いたのか、今まで異常に赤面して反論する。
「ち、違うよ！　そんなつもりで言ったわけじゃなくって」
「分かってる分かってる。お前が言いたい事は充分理解したから」
「絶対に理解していないよね、勇気は。ボクの話しをちゃんと聞いて」
「はいはい。お前の彼女候補を取らないからさ。てか、取れる訳ないし。安心しろよ、な」
「ちょっとは人の話を聞いてよ！」
非難の声を上げてくるが、あいにく今の俺には聞く耳を持たない。
「そう言えば、夢野さんだっけ？　今、ここら辺にいるの？」
「それがね」
苦笑いする雛菊さん。その様子だとお誘いは断られたのだろう。
「彼女の力があれば、我が部も活気付くのだけどね」
「雛菊さんがそこまで言わせる人材か。少なくともそいつは男じゃないな」
「当たり前よ。彼女は女よ」
「だろうな。雛菊さんが頼んで断った男って俺と祐希ぐらいだと思うし」
「それって何気に皮肉っているの？」
「いやいや、滅相もない。しかし、そうなると余計に気になるな」
「一応言っておくけど、変な気を起さないでよね」
ギク。
「いやだな、変な気をだって。まるで俺が何をするか分かったような風に言わないで」
くれ、と言うよりも早く雛菊さんが言葉を重ねる。
「彼女は結構人見知りなのよ。だから、貴方みたいな軽薄な男が近

づいたらまとまる話もまとまらないわ」
け、軽薄な男って。俺、そんなに軽薄そうに見えるのか。
確かに少しは悪乗りする所がなくもないといえるが、だからって……。
「……まぁ、彼女は貴方の同じクラスだから見る機会は幾等でもあると思うわよ」
へ？
同じクラスなの？
「勇気。まさか、同じクラスメイトの名前を知らなかったわけ？
ちなみにボクは今ので誰か分かったよ」
「うるさい祐希。全員分のクラスメイトの顔と名前を覚えている訳ないだろう。お前と違って俺は凡人なんだよ」
しかし、そうか。同じクラスな訳ね。
「もう一度言うけど、彼女にちょっかいを出さないでよね。出すなら必ず我が部につれてきなさい」
「何それ？　まるで、俺が映画研究部の一員みたいな発言」
「まるでじゃなくって、勇気も立派な映画研究部になっているよ。名義上だけど」
「ちょっと待て祐希。それって勝手に俺の名前が使われているって事か？　さては祐希。お前が俺の筆跡を真似て入部届けを出したな」
「ギク」
ギクじゃねぇ。
「祐希」
「ハハハ。そんな事よりも夢野さんに会って見ない？　今の雛ちゃんの話しでボクも会って話しをしたくなったよ」
「……お前と行ったら、夢野さんも確実にお前の餌食になりそうだな」
「何それ？　まるで人を肉食動物みたいな発言は」
「言葉通りだ。……それよりも祐希。お前に忘却魔法を掛けられたお方達は一体いつになったら正気に戻るんだ？」

「え？　そんなバカな……って勇気！」
視線を俺から逸らした瞬間に離脱。離脱時に雛菊さんの口から「全くもう」と呆れた声が耳に届く。
どうやら、俺が祐希の魔法から正気に戻った直後に口封じの魔法を掛けたのに気付いていたらしい。
ついでにトラバサミ――もちろん殺傷性がない奴だが――も仕掛けてきたしな。あれを解除するのは祐希でも五分は掛かるだろう。
悪く思うなよ祐希。お前が話しかけると必ずと言っていいほど女性は堕ちてしまうんだ。
これ以上の被害者を出す事無く、また俺の平穏が護られる様に動く義務があるんだ。故に、ここは一人で行くことを許して欲しい。
最も、お前と一緒に行くとろくに初対面の女性と話すことが出来ないというのが本音だが。
「夢野、か。どんな人物か楽しみだな」

第6話：夢野彩香

期待を胸に秘めながら、自分のクラスである2年3組の教室に入る。

「おーす」

適等に挨拶を交わして教室に入り、早速と雛菊さんのお気に入りである人物、夢野さんを探し始めるのだが。

俺、夢野さんの顔を知らなかったな。

「よぉ、坂本。随分と遅い出社だな。何だ？　また、神藤の連れの厄介ごとに巻き込まれたか？」

「おっ、真吾。いい所に来たな。なぁ、うちのクラスの夢野さんって何処にいるか分かるか？」

「質問を質問で返すのはよくないと親御さんに教わらなかったか、お前。まあいいけど。えっと？　夢野さんだっけか」

真吾は周囲を見渡し始める。目当ての人間がいたのを確認したのか、顎で「右を向け」と言ってきた。

「今、読書している眼鏡っ子がいるだろ？　彼女がお前のお目当ての夢野彩香さんだ」

へぇ。彼女が雛菊さんのお誘いを断ったあの夢野さんか。

第一印象は大人しい子って感じかな。ブックカバーを付けているから何を読んでいるか分からないが、時折「フフフ」と笑いを堪えた笑みが浮かぶから、彼女にとってはきっと楽しいものなのだろう。

「……三つ網をしている女性って始めてみたな」

「普通、そこに目がいくか、お前は」

「と、言うと？」

俺が尋ねると、真吾は音量を下げ、耳元で話しかける。

「あの胸を見て、何も感じるものはないのかね？」

「胸？」

真吾に言われて初めて気付く。

今までに見たことがない隆起している胸部に。
「真吾」
「ふっ、お前も気付いたか」
「何だあれは？　新手の胸パットか何かか？」
「そうだろうそうだろう。俺も最初はそんな感想を抱いたものさ。だがな坂本、良く聞けよ。あれは天然だ、完全なる天然物だ」
「な、なんと！？」
し、信じられない。
あれが完全なる天然物とは。俺の見立てでも軽くEは超えているんじゃないのか。
だってあれ。完全に机に乗っているし。
「あんな小柄なのにあの胸って。あれを見たら檜姉が発狂するんじゃないのか？」
「あぁ、するな。賭けにもならないぐらいに、絶対発狂するな」
「……雛菊さんが目を付けたのもあの胸が理由なのか？」
「雛菊？　水樹さんがどうしたんだ？」
「ああ、実はな」
俺は先ほどの顛末を真吾に簡潔に話す。
「なるほどな。けど、たぶんそれは違うな」
「断言したな。その理由を説いても？」
「彼女の魔法特性はちょっとばかりレアでな。たぶん、水樹さんはそれを目にしたんじゃないか？」
「魔法特性か」
「そうそう。彼女の魔法特性は確か……」
「錬金だよ」
答えたのは真吾ではなかった。
声は俺の背中越しから聞えてくる。
「早かったな、祐希。あのトラバサミには結構自信があったんだが、やっぱりお前の解除の魔法には意味なかったか？」
「勇気ね。普通、友人の口に布を巻きつけて挙句の果てに動きを封

じるようにトラップを張る？　三人とも物凄く怒っていたんだよ」
「普段からの俺の迷惑を考えたら可愛いものだと思うんだがな。それより、全員自分のクラスに戻っていたんだな？」
　また随分と珍しいことで。普段ならば鐘が鳴ろうが関係なく祐希の傍にいようものが。
　そんな俺の考えが読めたのか祐希はその真相を話し始める。
「今日は勇気の観察に力を入れるから皆には退場願ったんだよ」
「それって、朝言っていたあれだよな？」
　なるほど。だから今日は登校時も誰も一緒に来なかったし、檜姉妹や副会長の殺気がいつもよりも二割増しになっていたのか。
　今日一日平穏が約束された事に喜んでいいのやら、明日からの地獄を考えて悲しんでいいのやら分からないな。
「その通りだよ真吾君。最近、付き合い悪い親友が何に勤しんでいるのやら調査するんだよ」
「まるっきりプライバシーの侵害では、と親友は愚考いたしますが、その点はいかがなほどに？」
「大丈夫。勇気に気付かれないようにちゃんと尾行するから」
　それを本人の目の前で言うか、って俺は言いたいんだがな。
　最も、こうやって宣告されても、きっと俺は祐希の尾行を見付けられないんだろうな。
「なら、今日は真っ直ぐ帰るか」
「ダメダメ。いつも見たいに秘密の特訓場まで行くの」
「尾行されると分かって、わざわざ特訓場に足を運ぶバカが何処にいる」
「ここ」
　指を向けるな。あと、真吾。何気にお前まで俺を指しているんじゃねえぞ。
　このままじゃ、一日中尾行するかもしれないなこいつ。同性に尾行されても嬉しくないんだがな。どうせなら美人で優しくって、胸が大きい子が俺をストーキングしてくれないかな。……ごめん、や

っぱり今のなし。ストーキングされる事態ろくな事が起きなさそうだし。
「それよりも、夢野さんに声を掛けなくていいのか？」
ふと、思い出したかのように真吾が言う。
「あ、いや。俺はどんな子か見たかっただけだしな。祐希、お前はどうするんだ？」
「ボクも雛ちゃんが気になる子が見たかっただけ出し、別に声を掛けるほどでも」
「人見知りだもんな、お前。面識があっても話したことのない子に話すほど度胸がないもんな」
「それっていつの話しだよ。今ではボクだって人見知りするほうじゃないよ」
「そうだったな。ま、機会があれば少し話してみるかな」
その機会が直ぐに起こる事になろうとは、今の俺には知る由もなかった。

第7話：きっかけ

結論から言わせてくれ。先ほど言っていた機会が直ぐに来てしまった。

何を言っているか理解出来ないと思うが、俺も少々混乱しているらしい。正直言ってどうやって説明していいかマジで分からないんだ。

ただ言える事は、放課後の時間に雛菊さんのお目当ての人物である夢野さんと真正面に向かい合っている事だ。

いや、別に甘酸っぱい展開が起こる五秒前とかじゃないぞ。

彼女は真剣な眼差しで机に置かれている一枚のプリントと睨めっこしているから。

「しかし、お互い災難だったね」

無言の間に耐え切れなかった俺は思わず彼女に話しかける。

だって、女の子と二人っきりだよ。しかも祐希と関係ない女の子と。

俺の人生の中でこんなイベントが起こった事はあったか。いや、ない。断言しても良い。

「そうですか？　私は楽しいですよ」

柔らかく微笑む夢野さんの笑顔に思わず見惚れてしまう。

顔が熱くなるのを感じつつ、話しを続ける。話しをすれば気が紛れると思ったからだ。

「そう？　だって、あれって完全のハメじゃないか。皆して俺達を学級委員に推薦しやがって」

そう。今こうして俺達が放課後の時刻に残っている理由は、二人して周りの連中に委員会を押し付けられたのだった。

あれは酷かったよな。四時間目のホームルームで、委員会を決める時、女の大半が俺と夢野さんの名を上げるんだから。

それに便乗するように男連中が囃し立てるから、俺と夢野さんは

何も言い返す事が出来ず、こうして委員会の仕事をするハメになってしまう。
「それだけ坂本君に期待をしているって事だよ」
「そうかい？　それだったら、夢野さんにも大いに期待をしているんだろうね」
夢野さんの表情が暗くなる。どうやら、今の切り替えしの言葉は禁句らしいようだ。
えっと話題を変えないとな。何か話題になりそうなのは、と。
「そう言えば、それどうしよっか？」
目に付いた一枚のプリントを見て、これだと思った。
言われて夢野さんも「う～ん」と思案顔を浮かべる。
「そもそもマジックダンスって初めて聞いたけど、何も代表戦と同じ時期にかぶせなくてもよくないか？」
「仕方がないよ。うちの行事は体育祭と文化祭が続くんだから」
「俺的にはそれが納得いかないんだよな。昨年だって大変だったぜ。体育祭が終わったかと思うと二週間後には文化祭だもんな」
「皆へとへとだったものね。特に代表戦に出て文化祭のメインに出た子なんて、目が虚ろになっていたよ」
日程的にありえないと言いたい所だが、うちの体育祭と文化祭は隣町の武蔵学園と合同で行う。
学園同士の交流を兼ねてと言うのが目的であるが、今では互いにライバル意識を持ち、行司をする度に張り合う妙な間柄になっているらしい。
学園同士でスケジュールをあわせるのは大変なのだろう。互いに大丈夫な日を選んでいったら、たまたま体育祭と文化祭が続いて重なったのかもしれない。
その中で一番盛り上がるのが、体育祭の代表戦に文化祭のメインイベント――今回の場合はマジックダンスになる。
「ん～。今は目先の体育祭である代表戦で皆、頭が一杯って感じだしな」

「しかし、早く決めないと副会長がうるさいわよ。会長は笑って許してくれるかも知れないけど」
「だよな。……よし、夢野さん。どうだろう？　今回は俺達が出場するってのは？」
「はい？」
夢野さんの目が点になる。予想しなかった言葉なのだろうか、素っ頓狂な声を上げた夢野さんはそれ以降、動く様子が見受けられない。
「……はっ」
あっ、正気に戻った。
「なな、何を言っているんですか坂本君は。わ、私なんて文化祭のメインイベントに出る資格なんてありませんよ」
「資格云々って言ったら俺も無理だけどな。けどさ、誰もやりたがらないっていうし、取り合えず名前だけでも埋めておかないとダメじゃないかな？」
文化祭のイベントは体育祭のイベントと違って、どうも客寄せパンダの傾向が強い。
まあ、客を集めるためのイベントともいえなくもないから、客寄せパンダは言いえて妙と言うものだが。
うちの学園は体育祭や競う行事には燃える方でも、文化祭みたいなお祭り的な行事はどうにも積極的に動いてくれない節がある。
皆が皆、祭りを盛り上げるよりも祭りを楽しむ気持ちが強いからだと思われる。
故に、この文化祭の行事は必ずと言っていいほど武蔵学園に連敗しているとのこと。神輿を担ぐ人間がやる気がないのだから当然と言ったら当然だな。
「け、けどですね。私なんかが出たら笑いものですよ。もっと、その相応しい人がいるじゃないですか。檜さんとか」
「檜姉か。確かに認めは幼女だが、あれはあれで人気があるからな。だが、祐希がやる気を起さないから無理だろう」

「じゃ、じゃあ、神藤君を説得すれば、万事問題ないんじゃないですか？　私達がクラス代表と出て恥を掻くよりも断然いいですよ」
かなり目立つ事が嫌いなのか、説得に必死さが出ている気がする。
夢野さんの魔法特性は錬金術だから、確かにダンスに応用するのは困難だとは思うが、それはそれで面白い物が出来ると思ったんだがな。
そうなれば俺も俺の魔法特性を最大限に生かして、観客をあっと驚かせる自信が多少はあったんだが、本人がここまで嫌がるのでは仕方がない。
「……分かった。一応、祐希には説得してみるが、あまり期待はしないでくれよ」
「は、はい。是非ともお願いします。そのお詫びと言ってはなんですが、その時の衣装は任せてください」
衣装だと。
「ダンスって制服で踊るんじゃないの？」
「何を当たり前な事を言っているんですか。このプリントに衣装は各自で持参してください、って書いてあるじゃないですか」
文化祭の詳細が記載されているプリントを持ち出し、一番下の行を指差す。
確かに夢野さんの言うとおり、衣装は各自で持参のことと記載されている。
危なかった。衣装なんて持っている訳ないし、奇抜な格好を着て踊るなんて俺には少々荷が重たすぎる。
「へぇ。夢野さんってそう言うの得意なの？」
「ひ、人並み程度ですがね。けど、神藤君が出場するなら、私は心血を注いで最高傑作を作りますよ」
小さくガッツポーズを作る夢野さん。
祐希が着るかも知れないってだけでそこまで言える所を見ると、やはり彼女も祐希狙いなのだろうか。
羨ましいぞ、祐希。三回ぐらい地獄に落ちろっと叫んでやりたい

ね、まったく。
「それじゃあ、ますます祐希の説得に力を注がないとね。良し、出場者はどうにかなりそうだな。後は他のクラスと打ち合わせして、会場と出場者の確認。それに、手伝っても良いと言ってくれるスタッフをかき集めないといけないな」
その辺は祐希が絡めばどうとにもなるかな。アイツが出るだけで、女子の名乗り率はきっとうなぎ登りになるだろうし。
「そうですね。他は追々詰めて行きましょう文化祭は体育祭が終わるまでは、きっと話しは進まないだろうと思いますしね」
「そうだな。なら、今日はこれでお開きだな」
「はい。これから一緒に頑張りましょうね」
「おう。俺は体育祭は戦力外だからな。じっくりと文化祭のネタを練っていこうぜ」
昨年の文化祭は一年と言うこともあって、ただの展示会で終わってしまったからな。
もっとこう、皆でワイワイ騒ぎながら準備して、当日もそれ以上の楽しい思い出を作れればいいな。
「はい、頑張りましょう」
可愛いな、この子。朝の時間に見かけた時となんか印象が違うな。もっとこう、大人しい子って思ったんだけど明るい子じゃないか。今日一日だから分からないけど、彼女が他のクラスや友人らしき人物と話しているのを見たことがなかったから、てっきり大人しい子って勘違いしちゃったな。
簡単な打ち合わせが終わり、互いにカバンを持ち上げたとき、彼女の携帯電話が鳴る。
「あっ、すみません」
一言断って、夢野さんは携帯電話を取り出した。メールの方だったらしく、携帯電話を操作して内容を確認する。
何か表情が硬くなっているような気がするが、何かまずい内容だったのかな。

「すみません、坂本君。お友達が呼んでいるので、今日はこれでいいかな？」
「あっ、そうか。うん、いいよ。友人を待たせたらあれだしね」
夢野さんは「すみません」と深々とお辞儀して、早々と教室から出て行く。
友人と一緒に帰る約束をしていたのだろうか。突然、打ち合わせをしようなんて言って悪かったかな。
「さてと」
誰もいない教室に一人で残るのも寂しいので、俺も早々と教室から去る。
祐希をどうやって説得するか、下駄箱まで思案に暮れていると、思わぬ事態と遭遇してしまった。

第8話：目撃

下駄箱に着くまでの道中、俺は祐希をどうやってマジックダンスに誘うべきか頭を悩ませていた。

祐希はどんな嫌な頼みごとでも二つ返事で「うん」と嬉しそうに頷くのだが、一つだけ頑なに頭を縦に振ってくれない事がある。

「ダンスとなれば、やっぱり正装だからなあ。どうやって騙して誘うべきか」

何故だか知らないが、祐希は正装をしたがらない節が多々ある。主にスーツ姿に抵抗があるようだ。

まあ、正直言って祐希がスーツを着て似合うかと聞かれると、NOと言わざるを得ない。

男性と見分けられない程の女性顔はそれだけで、どっちかと言うとドレスの方が似合うんじゃないのか、と十人中九人が言うだろう。

それに加え、背丈は男の平均よりも若干低い。その辺りにコンプレックスでも抱いているのだろうか。

「あの祐希にコンプレックス、ねえ」

自分で言ってなんだが、想像もつかなかった。

結構前から友好を深めている俺にとって、祐希が喜怒哀楽の中で「喜」と「楽」以外の感情を見たことはない。

どんな事でも笑って済ましてしまうあのお人よしが、コンプレックスのような感情を抱いていたら、ってそんな事が分かった所で俺にはどうにもならないよな。

話しが脱線してしまったな。アイツをマジックダンスに誘う方法を考えなくては……って、待てよ。

ふと、閃きが頭に浮かぶ。

要するに、祐希はスーツ姿になるのが嫌い。ならば、スーツじゃなくてドレスでも何でも好きな格好をさせれば万事OKじゃないかな。

いやいや待てよ。それはそれで色々とゴタゴタがありそうだから、いっそのことアイツに女装をさせるのもアリだな。
アイツならば女装をした所で違和感なさそうだし、むしろ男からの熱視線も独占しそうだな。
よし。
「取り合えず、祐希を女装させる線で言ってみるか」
策は決まった。祐希を女性にする方に関しては問題ないだろう。
金髪のオッドアイだけでも人目につくほどの異彩を放っているにも関わらず、ドレス姿を想像しただけで物語上の姫君に昇格しそうな程の風貌を見せてくれるだろう。男と分かっている俺ですら想像しただけで生唾ものなのだから、祐希を男だと知らない人物が見ればたちまちに虜に陥ることだろう。
もしかして俺、実はとんでもない策を考えてしまったのかも知れないな。
さて、そうなると浮上する問題が一つあるのだが……。
「問題ないよな。祐希の相手なんて」
きっと、檜姉妹や副会長、そして雛菊さんの誰かが男装するなりして出場してくれるだろう。
「ダンスの件に関しては何とかなりそうかな」
頭の中で自分なりの段取りが構成出来た事でようやく肩の力が抜けた気がした。
自分の意思で決まった仕事ではないけど、任された以上はやらざるを得ないしな。
と、考え事に夢中になっていたのか、気がついたら一階の下駄箱に到着していた。
俺のクラスは二階にあるから階段を下りないといけないんだが、階段を下りた記憶がないな。ダメだな。考え事に浸ると周りが全く見えなくなる癖はどうにかしないといけないな。
「上手く坂本勇気に近づけたわね」
人声が聞える。しかも自分の名前が出た事で、咄嗟に壁際に体を

移動して身構えてしまう。
「って、何をやっているんだ、俺は」
咄嗟に身構える自分の行動に恥かしさを覚えてしまう。
師匠との訓練の成果なのか、不意な行動や名前を呼ばれてしまうとついつい身構えてしまう癖が出来てしまったようだ。
最も、そのおかげで檜姉妹の奇襲や副会長の攻撃をかわす事が出来たのだけどね。
「や、約束通り近づいたんだから、それを返してよ」
ん。この声は……。
ついさっきまで聞いていた声。なにやら切羽詰っている感じに批難する声に俺は気付かれない様に声主達の方へ歩み寄った。
足音などを鳴らさないようにすり足で近づくと、俺のクラスの下駄箱の前で夢野さんと女子生徒二人が対峙する形で口論していた。
「ダメよ。私はこう言ったはずよ。返して欲しかったら、祐希君の素性を調べてくる事って」
なんだか穏やかな話しではないようだな。
「けど、あの神藤の唯一の男友達とも言える坂本に近づいたのは中々の策士よ。将を射るなら先ずは馬を射るって作戦は見事だね」
「飛鳥、あまり彩香を褒めないの。……いいかしら、彩香。あなたの大事なあれを返して欲しければ、必ずあの神藤祐希の正体を見抜き証拠を掴んでくるのよ」
それを最後に二人は夢野さんから去っていく。
彼女達二人の背中が見えなくなったのを機に膝から崩れ落ちる夢野さん。
「最悪な場面を見てしまったな」
何が何だか察することは難しいが、一つだけ分かったことがある。
それは夢野さんがあの二人に脅されて祐希の正体とやらを見抜き証拠を掴む為に、俺に近づいてきたってこと。
正直、さっきの笑顔やら反応は演技だったのか、と黒い感情が押し寄せてくるが、彼女の泣き崩れる姿を見てしまうとその気持ちも

霧散していってしまう。
何でだろうか。騙されたはずなのに、彼女の姿を見たら思考が妙にクリアになっていく気がする。
ああ、この感覚に覚えがあるな。俺は今、怒りに満ち溢れているらしい。
「こんなとき、勇気ならば――」
ふと、そんな事を考えて、その考えを無理やり止める。
俺はアイツと違って何でも出来る訳じゃない。
天才でもなければ秀才でもないし、高確率の可能性で失敗するただの凡人だ。
だからこそ、ここで彼女へ駆けつけて主人公の如くか慰める事なんて出来ない。
「ならば……」
しかし、俺にだって祐希に出来なくて俺だけが出来ることがある。
その為に俺は師を仰ぎ、数多の時間を費やして運動能力に研鑽をかけてきた。
「……はっ」
思わず鼻で笑ってしまった。祐希の為に磨いてきた力を別目的でも良いから発揮できる時を――俺は待っていたのかもしれない。
「と、言うわけだ」
どうやら怒りに身を任せている時は感覚も妙に鋭くなっているらしい。体に違和感と言うか、言葉では言いにくいけど俺に何かしらの効果が発揮されているのを感じる。もしかすると、今の俺は俺の想像を遥かに超えた実力が備わっている、なんて考えは都合が良すぎか。
……ま、火事場のバカ力とは意味合いが違うかもしれないが、怒気を孕んだ俺はスペックが急上昇するらしいな。
その感覚を頼りに、俺は誰もいないはずの場所に向って宣言する。
「見ているんだろ、祐希。早速で悪いが今日の夜、お前の正体とやらを聞きに行かせてもらうからな」

第9話：覚悟

「見ているんだろ、祐希」
名指しで呼ばれ、ドキッと心音が跳ね上がるのを感じた。
び、ビックリした。さっきまで気付く気配がなかったのに。
夢野さんの諍いを見た途端、まるで人が変わったようにボクの同調を見破った勇気に驚愕を覚えてしまった。
あんなに真剣な表情を見せる勇気の姿は何年ぶりに見たことだろうか。そうだな。ボクの記憶が正しければ、小学五年のあの時以来かも知れないね。
「と、言う事になるけど、ゆう君はどう思う？」
「え？　あ、えっと……。ごめんなさい、何の話だっけ？」
いけないいけない。勇気と夢野さんの丸秘打ち合わせを覗き見るのに夢中で、今日の作戦会議らしい会合の内容をほとんど覚えていないや。
はあ。何でよりによって今日なんかに代表戦の事前作戦会議なんか開かないといけないんだろう。
大体、代表戦は事前に何人か候補に上げて選出戦を行い、それに生き残った人間が代表戦に出るのが通例だ。確かに今年の二年は優秀な人材が豊富なのは認めるけど、こうやって集められた人物を見ると思いっきり身内で固めた感が否めないよ。
代表戦の主力人は主に二年生になるのが通例だ。三年は今後の進路があるし、一年は基礎能力が充分に備わっていないから、自然的に二年生が主力になってしまう。もちろん、そんな通例の枠組みにはまらない例外は必ず存在する。
たとえば、琴ちゃんこと檜琴音の妹である、茜ちゃんこと檜茜がそれにあたる。彼女の魔法名である散歩は私達の可能性を大きく広げてくれるだけの効果を持つ。それに加えてひまちゃんこと、天野向日葵は我が学年の実力ナンバー2を誇る実力者。

ひまちゃんの魔法特性である吸収は貴重な特性らしく、あらゆる方面から声が掛かっているらしい。だから、今後の進路も既に決まっているらしく、大学試験や就職活動に勤しむ必要性はないとのこと。正直羨ましい話しだと思う。

そのひまちゃんが心配そうにボクを見つめてくる。綺麗な顔立ちをしているから、そんな風に心配されると見惚れるよりも申し訳なさが先に来てしまう。なんていうか、こんな美人の彼女を心配させたボクが悪いと、そんな罪悪感を抱いてしまうんだよ。

「どうしたの、ゆう君。今日は会議が始まってから終始心ここにあらずって感じよ。何か不安ごとでもあるの？」

「い、いえ。特にそう言った事はありませんが、ただ……」

「ただ？」

「この面子を見てみると、ちょっと戦力不足は否めないかな、と思いまして」

真吾を除いた全員から「え？」と素っ頓狂な声が上がる。

本当は勇気と夢野さんの動向が気になって同調を使っていたから、と言うのが本音なのだが、そんな恥かしい行為を吐露する事は出来ない。

一応、妨害の魔法を掛けているから琴ちゃんの読心術も効かないと思うけど……もし、聞かれたら羞恥心で死んじゃうかも。

へ、平常心になれボク。クールだ、クールになれ。前も勇気が言っていただろ。良い男はクールであることって。

けど、今の発言は何も苦し紛れに話しを逸らしたわけでもないんだよね。このメンバーで唯一の攻撃力を持つ真吾君は「うんうん」と何度も首肯しているし。

「俺もその点は神藤に同意するな」

ボクの気持ちをくんでくれたのか、真吾君が話しを継ぐ。

「やはりさ、火力不足だと俺は思うんだよ」

「それはどう言う意味かしら、真吾君」

「言葉通りの意味さ、副会長。俺達の中で攻撃手段に優れている人

間ははっきり言うと俺だけだろ？　神藤は万能だから何処でもそつなくこなせるけど、はっきり言うと副会長や水樹、檜姉妹の魔法特性は防御や補助に優れていると思うんだ」
と、言うよりも彼女達の攻撃手段は皆が扱える初級の魔法のみ。そんな威力の低い魔法では代表戦で勝ち上がるのは難しい。
「ならどうする訳？　攻撃力に優れている人間は何人か思い当たるけど、正直戦術的価値は低いと私は思うわよ」
「水樹の言うとおり、攻撃手段に長けた奴で戦略的価値が高い奴はいないと言えるが……ほら、いるだろ？　たった一人、適した人材が」
ニヤ、と口端を曲げる真吾君。彼が何を進言したいのか分かったボクは思わず「なるほど」と呟いていた。
「真吾君は勇気を参加させようとたくらんでいるんでしょ」
「なっ！？」
またもや、真吾君を除いた全員が驚愕の声を上げた。
対する真吾君は再び口端を曲げて「その通りだ」と首肯した。
「ちょっ、ちょっと待ってよ。皆はあのバカが周りからどんな風に呼ばれているか知っているでしょ！？」
「そ、そうですよ。それに坂本勇気はきっと手を抜きます。それは私達の諍いで証明されています」
最初に反対の声を上げたのは琴ちゃんと茜ちゃんだった。
二人は意見は同じだけど、きっと反対の理由は違うだろうね。
琴ちゃんは勇気と同じクラスだから、勇気が昼行灯なんて不名誉な名前を与えられている事で戦力外と思っているだろう。
対する茜ちゃんは、普段から飄々としている勇気の態度が気に食わないって所かな。まあ、勇気の本気を見た事がある人物なんてボクと真吾君ぐらいだろうし、それは仕方がないかな。
「そう？　勇気を仲間に引き入れるのは私的には悪くない手だと思うよ？」
と、思った矢先、雛ちゃんから賛同の声が上がる。

雛ちゃんが同意するとは思わなかったのだろう。ボクを含めた全員が目を丸くして彼女を見ているのだから。
「え？　どうしたの？」
「いえ、その。まさか、雛菊ちゃんの口からそんな言葉が出てくるとは思っていなかったから」
「そうは言いますが副会長。勇気の魔法特性は正直言うと、私達の中でも特異性に溢れている力を持っています。それを自在に操る力を持つ勇気は、使い方次第で充分化けると私は睨んでいるんですが」
雛ちゃんの発言に琴ちゃん達の顔が歪む。
三人とも雛ちゃんの言葉を完全に信じられないらしく、どうも納得出来ないと顔で物語っている。
「でも」
琴ちゃんが思案顔のまま言った。
「私はあのバカの魔法特性って知らないんだよね」
「あ、姉さんの言うとおり私も知らないかも」
「言われて見れば……。真吾君や雛菊ちゃん達は知っているのかしら？」
ひまちゃんの言葉に真吾君と雛ちゃんは首を横に振った。
「アイツの魔法名は知らないですがね。特徴は大体把握しています」
「右に同じです」
「なによ。魔法特性も知らないで、あのバカの擁護をしたって言うの？」
雛ちゃん達は、琴ちゃんの言葉に「そうだ」と頷いた。
そんな二人の対応に琴ちゃんは呆れたのか「やれやれ」と肩を竦めて、反論を口にする。
「正直言うと私は反対です。確かにあのバカの身体能力は高いのは認めますけど、魔法の実力は皆さんのご存知の通り、下の下。そんな彼を代表戦なんかに推薦すれば、周囲から波乱を招くのは必須だと私は思います」
「姉さんの同意です。仮に坂本勇気を引き入れると考えるならば、

それ相応の実力があると証明しなければなりませんよ」
「二人の話しは最もだわね。咄嗟の判断力や機動性は高いことは私達の不意打ちを避け続ける日々を見ても分かるけど、これは魔法のみで行われる決闘よ」
それを言われると弱っちゃうな。
この代表戦はあくまで魔法使いの能力発表にもつながるため、打撃を初めとした肉弾戦は硬く禁じられている。
魔法の実力が乏しいと思われている勇気の参戦を納得する為にはそれをクリアする必要があるのだ。
「ならばこうしましょう」
話しが平行線になりつつあったとき、雛ちゃんから提案が上がる。
「今度の代表戦を決める戦いに勇気を参戦させましょう。理由は……副会長ならでっち上げる事は可能ですよね」
「そ、それは可能だけど……。雛菊ちゃん本気？」
「はい、本気ですよ。仮に勇気が手を抜く様な事があれば……そうだね。琴音の貞操が危ないって脅すのはどうかな？」
綺麗な笑顔でとんでもない発言をする雛ちゃんに全員が絶句した。
その直後、直ぐに我に返った琴ちゃんがすぐさま赤面しながら反論する。
「ちょっ、そこでどうして私の名前が出るの！」
「え？　だって、毎日毎日ちょっかい出しているのは愛情の裏返しなんじゃないの？」
「雛菊、絶対分かってて言っているでしょ」
「あれ？　何のことかな」
「こ、このサディスト女」
「あら、言ってくれるわね。ロリ女ちゃん」
あ、それは禁句。
「な、な」
ああ、遅かったよ。
この二人ってたまにだけど、こうやってけんか腰になる節がある

んだよねえ。
本当は仲が良いはずなのに、どうしたものか。
「はいはい、ストップストップ。二人とも喧嘩なら他所でやってちょうだいね」
炎上する前に、直ぐにひまちゃんが止めに掛かる。
二人の喧嘩をよく仲裁するからお手の物って感じだね。本人にとっては非常に嬉しくないことかも知れないけど。
「まあ、勇気に関してはボクからも説得してみせるよ。親友のボクがお願いするんだもん、きっと二つ返事で返してくれるよ」
「お願いというよりも、半分脅しが入っているがな」
「何か言った、真吾君」
「気のせいじゃないか、神藤」
ボソッと言ったつもりだろうけど、きっちり聞えていたよ。
ボクがいつ脅しをしたって言うんだよ。ほんと、真吾君もボクに不名誉な発言をちょくちょく言うから困るよね。
説得かあ。……ん？　説得？
「って、あああああああっ！！」
「ど、どうしたのゆう君」
「う、ううん。な、何でもないよ」
「今のを何でもないと取るにはあまりにも難しいんだけど」
「なんでもない、なんでもない。だから気にしないで」
「そう？　なら、坂本君を参戦させた時の事も考えないと」
危ない危ない。事の重大さをすっかり忘れていたよ。
さっきのやり取りですっかり忘れていたけど、ボクが秘密を持っていることを勇気にばれちゃったよ。
いや、別に疚しい秘密でもないんだけど、けど、けど……。うぅぅ、ど、どうしよう。
そりゃあ、何時かは正直に話す時期が来るんじゃないかと、覚悟だけはしていたけど、まさかこんなに早く秘密をばらさないといけない機会が出来るなんて予想もしなかったよ。どうしてボクには未

来予知の才能がなかったんだろう。
ど、どうしよう、わ……じゃなくってボク。幾等勇気が単純すぎると言っても下手な嘘で突き通せる自信はないし。
やっぱり本当の事を話すべきか、いやいや、本当の事を話して勇気に嫌われるのだけは何とかしても避けたいし、でもでも。
「先輩？　大丈夫ですか。何だか顔が青くなっていますけど」
「な、何でもないよ」
「けど」
「大丈夫大丈夫、茜ちゃん。ボクはいたって普通だよ。ノーマルだよ」
「その口調からして、先輩が普通じゃないと思うんですけど」
ご、ごもっとも。普段のボクなら「ノーマルだよ」なんて返しはしないはず。
思いっきり錯乱しているなボク。
「そうよ、ダーリン。気分が悪いならば今日はこれで止めにする？　打合せは大丈夫だけど、それで体調を崩したら本末転倒だと思うし」
雛ちゃんがひまちゃんに目配せする。その意図を察知したひまちゃんは軽く頷く。
「そうね。まだ代表戦のメンバーが確立された訳もないし、今日のところはこの当たりで終わりにしましょうか」
「なら、坂本の話しは今後だな。俺からもそれなりに探りを入れてみるから。神藤、アイツを引き入れる役は任せたぞ」
「ま、任せてよ。親友のボクの頼みなら勇気は絶対に二つ返事で返してくれるよ」
「きっとから、絶対になったのはあえて突っ込みを入れないで置くが……まあ、任せたぜ。俺もアイツが参戦するとなれば嬉しいしな」
「う、うん」
それを最後に真吾君は退出する。
今回は気を使ってくれたのか、帰りにちょくちょく誘ってくれる

四人も早々と退散してくれた。
皆が「大丈夫？」とか「無理はダメよ」と体調を気にしてくれたのには大変ありがたく、申し訳ないと思ったけど、今のボクにそんな事を考える余裕はない。
ボクは携帯電話を取り出し、ある人に電話をかける。
多忙な人だから出てくれる保障はないと思ったけど、今回は呼び出し音が数回鳴っただけで出てくれた。
「あ、お父様。お忙しい中ごめんなさい」
さあ、どうやってこの難関をクリアしようか。

第１０話：神城奈々

「いつ見ても、凄い門だな」
家に帰った俺は、荷物を放り出し学生服のままとある場所へ急行した。
急行した場所はもちろんのこと、祐希が住む神藤家のお屋敷。……屋敷と言うよりも城と呼ぶべきか。
目に広がる神藤家の門にいつもながら圧倒されつつも、備え付けられているセキュリティカメラに視線を向けて言う。
「夜分遅くに申し訳ありません。坂本勇気です。本日は師匠と――」
いつものように言葉を言い終わるよりも早く門が開く。同時に俺に向けて寒気すら感じる殺気が飛ぶのを感じ、無意識の内に距離をおくように後方へ跳んだ。
「反応してから退避するのにコンマ五って所ですか。もう少し反射的に動けたんじゃありませんか、勇気」
「し、師匠？」
門の奥から現れたのはエプロンドレスを纏った女性だった。
日本人特有の黒髪を一房に纏めている。必要以上にフリルの多いエプロンドレス――メイド服を着込んでいる女性は、両手に白木の獲物を持って佇んでいた。
「構えなさい、勇気」
「へ？」
「悪いですが、今日は貴方を神藤家の敷地内に入れる事は出来ません。その理由、貴方は分かっているでしょ？」
その言葉にピンと来た。
なるほどなるほど。確か、祐希は俺に同調――相手の五感を完全にシンクロさせる事が出来る魔法をかけていた。
と言う事は、俺の考えなどアイツが看破出来ない訳ないから、自分の秘密を守る為に師匠に護衛を頼んだって所か。

――なるほどなるほど。どうやら、祐希。あれを見ても、お前の答えは否なんだな。
「先にお伝えしますが、この事は祐希様は存じ上げておりません」
「……は？」
「貴方は直ぐに表情に出る。戦術の成功率を上げたければ、先ずは表情のコントロールを覚えるべきですね」
「いえ、それは仰る通りなのですが。……なら、何で師匠は俺の邪魔を？」
「旦那様のご命令です」
旦那様。つまりは、祐希のお父さんである神藤拓馬さんか。
神藤家の頭であり、祐希と同様に天才の名前を欲しいままにしてきたあの人か。
戦争根絶を胸に、世界中を飛び回ってはあらゆる面で色々と活躍していると聞いているが。
「あの拓馬さんが俺の邪魔を？」
あの人とは中学校一年以来から会った事はないが、気さくでいい人だった覚えがある。
金持ちで天才肌ともなれば少々高飛車になる傾向が強いのだが、俺の知っている限りの神藤拓馬さんは自分の才能などを鼻につけないお人だ。
そんな拓馬さんが俺の邪魔をすると言う事は相当な事だ。普段は温厚なお人故、今度会ったときに何を言われるか畏怖の念を抱いて仕方がない。
「全く、勇気も思い切った事をしてくれましたね。まさか、祐希様の秘密を暴こうとするなんて――貴方、そんなに死にたいんですか？」
ゾクリ。
睨まれただけで全身に寒気が走る。
やばい。師匠はマジで俺を殺しに掛かろうとしている。
それほどなのか、祐希の秘密とやらは。そこまでして、守りたい

秘密とやらなのか。
蛇に睨まれた蛙のように全身が硬直しかけていくのを肌で感じる。
まずい。これ以上、師匠の殺意にのまれたら何も出来なくなってしまう。何か反論しなくては。
「な、ならば尚の事、アイツの秘密とやらを暴こうとしている人間が許せないんじゃないか？」
「……どう言う事です？」
「アイツの秘密を暴こうとしている輩がいる。――正直、祐希の秘密とやらに興味はないんだ。ただ、それを機に対策の意図を見つければと思って」
「だったら尚のこと、貴方はこうして私の前に立つべきじゃありませんでしたね。祐希様の秘密を暴かれるのはまだ時期尚早。決して知られてはならないもの。私は祐希様の懐刀。例え、貴方が相手でも容赦はしません」
ダメだ。師匠から伝わる殺気が増幅されるばかりだ。
そして、ついに師匠は両手に持つ二振りの刀を抜く。
刀身に淡い金色の輝きを纏わせる様は、師匠が得意とする雷の魔法剣術を放つ準備態勢だ。
「……師匠。本気なんですね」
俺はあえて師匠に問う。
返ってくる言葉など分かりきっているが、それでも心の準備が欲しかったのだろうか。俺は聞かずにいられなかった。
対する師匠は無言で首肯。順手で持っていた刀を逆手に持ち直し、身体を前倒しに構えなおす。
「雷の魔法剣術、雷迅。貴方はこれを一度も攻略できていませんでしたね」
「……祐希も攻略に苦戦しているんだ。凡人の俺が攻略するのはそれこそ酷でしょ」
「フフフ。でも、決して貴方は無理だとは言わないんですね。……切り札を切りなさい、勇気。この技をクリアすれば入っていいと旦

那さんから言付かっております。祐希様の秘密を暴こうとするのですから、それぐらいの覚悟は持ち合わせてください」
「そうですか。……要するに試されているんですね、俺は」
燃える展開ここにアリってか。……と、呑気に言っている場合ではないな。
相手はあの祐希ですら負け越している我が師、神城奈々だ。
勝てるのか。神の名を持つ天才を背負いし者に。
「って、今更そんな事を考えている暇はねえよな！」
そもそも、神藤家に来た時点でそんな覚悟は既に出来ているはずだ。
相手が誰であろうと臆すること事態、時間の無駄だ。祐希を敵に回すのは得策ではないが――あれを見て、なんとも思わない奴は男じゃねえ！
「――御身奉る」
詠唱開始。
俺の可能な限りの最強な手札。
発動時間に一分を有するが、俺の魔法を打ち砕いて倒そうと算段しているのか、師匠は動く気配がない。
ならば、その時間存分に使わせてもらう。
「臨むは毘沙門天、天照皇大神。兵は十一面観音、八幡神。闘うは如意輪観音、春日大明神」
「これは……」
詠唱の詩で俺の魔法の正体を知ったのだろう。師匠は慌てて一振りを投げ出し、刀身に雷を纏わせていく。
「光臨せよ、雷鳴の轟。響け雷声、金色の夜叉！」
師匠も詠唱を！？
やばい。この魔法は威力は強力だがその分だけ発動時間が長いのが欠点。師匠が迎撃体勢のままでいてくれたからこそ、この切り札を選んだのに……。
今から手札を代えるか。しかし、あの師匠に対抗出来る手札なん

て――。
そう思っている矢先に使用の魔法剣、雷迅が完成する。刀身からバチバチと放電しながら発光するその様は光の剣と呼ぶに相応しい様であった。
「驚きました。まさか、九字の魔法を会得していたとは」
「者は不動明王、加茂大明神」
「本来ならば貴方の全てをこの身で受けて、跳ね除けようと思いましたが九字の魔法は私には荷が勝ちすぎる」
「皆は愛染明王、稲荷大明神」
「だから、申し訳ありませんが先手を打たせてもらいます」
「陣は聖観音、住吉大明神」
「――必殺」
ちっ、ダメだ。
詠唱が間に合わない。急いで別の手札を――。
「――そこまでです！」
それは一瞬の出来事だった。
師匠が雷迅を放とうと一足飛び。
俺が詠唱を破棄して迎撃体勢を取ろうとした僅か二秒。
その僅か二秒の間に地面から鎖が飛び出し、俺と師匠の手足の自由を封じていく。
「これは拘束の鎖？」
その魔法の正体は誰もが扱える初級の位置にある捕縛魔法。地面から無数の鎖を出現させて相手の動きを封じさせる魔法。
「貴方達、こんな夜遅くに何をなさっているのですか！」
上空から叱咤の声が飛ぶ。俺と師匠の動きを封じた魔法使いは上空にいるらしい。
俺達の勝負を妨げた無粋者に視線を走らせ――身体が凍りついた。
夜の空ゆえ、純白のドレスが強調的に映り、金色の髪が星々の輝きに負けないぐらいに輝いて見える。
一言で言えば綺麗な女性であった。だけど同時に既視感を覚える。

会った事のない女性のはずなのに、何処かで会った事があるような気がしてならなかった。
そんな事を考えている俺の耳に、師匠の口から信じられない言葉が届く。
「ゆ、祐希様」
あ、そうか。
どこかで見た事があると思ったら、何だゆう、き……え？
「は、はいぃぃぃぃぃ！？」
ちょっ、ちょっと待ってくれ。
今のは俺の聞き間違えだよな。

第１１話：野郎は女郎だった

「あー、師匠。どうやらさっきので少々耳をやられたみたいです。すみませんが、もう一度言っても」

きっと空耳の類の聞き間違いだろう。そうだよな。まさか、上空に佇む女性があの祐希だって誰が信じようか。

確かに髪の色やオッドアイと言った類似点は多いけど、アイツの髪は腰まで伸びるほど長くはない。いや待てよ。最近ではウィッグと呼ばれている付け毛なんてものもあるみたいだし、だがしかし、祐希がそれを付けて俺を騙す理由なんてないし、いやでも。

考えれば考えるだけ深みにはまっていく。可能性で考えてしまうと、目の前の女性が祐希じゃないと言えば祐希じゃないし、祐希だろうといえば祐希だろうに見えてしまう不思議。

だからこそ、あえて聞えなかったと言わんばかりに師匠に尋ねたのだった。師匠に否定して欲しいと言う願望をのせて尋ねたのだけど、

「え？　……はっ」

うん。今の行動は「しまった」と言わんばかりに口元を手で押さえたよな。

そんな反応を見せられれば、師匠が言ったことの真実味が増えてしまうじゃないか。

軽く溜息を吐き、なるべく動揺を隠すように言った。

「お、お、お前、ゆゆ、祐希なのか？」

訂正。どうやら動揺を隠す事は出来なかったよ。

声がもろに震えているし、さっきから走馬灯の如く祐希との思い出がリフレインしていく。

これは、もしかしなくても次の朝日を拝めないパターンだな。我が人生、実に短かったものだ。

「フフフ。驚きましたか、勇気」

口元を隠して楽しげに笑う。彼女は俺の言を否定せずに話しを進めていく。
宙でヒラリと身体を一回転させ、ドレスの裾を掴んで一礼した。
「――初めまして、坂本勇気様。ボク……もとい、わたくしの名は神藤優希と申します。家庭の事情とはいえ、長々と貴方様を騙し続けてしまった無礼をどうかお許し願います」
言葉を失うとはこのことを指すのだろうか。優雅に頭を垂れる彼……いや、彼女か。そんな彼女の一つ一つの動作が絵になり、なんて言うか「お嬢様」って言いたくなるオーラを感じてしまう。
一礼を済ませた祐希じゃなくて優希だっけか。頭が混乱するので神藤は地上へ舞い降り、師匠へ視線を向ける。
「それにしても、奈々。これはどう言うことでしょうか？　わたくしは言いましたよね。本日、勇気に事の真実をお話しますと」
「は、はいお嬢様。ですが、旦那様は「勇気を追い払え」と申し上げましたが」
「お父様が？」
師匠の話しを聞いて、端正な顔が多少ながら歪む。
神藤は短く「来て」と呟き魔法を発動。神藤の命令に従い彼女の掌に光が集まり、携帯電話を生み出す。
転送や移動系の魔法って結構高等技術なのにな。それを軽々と行うから、やはり神藤は俺とは才能が違うと思い知らされる。
呼び出した携帯電話を操作し、とある人物へかける。まあ、話しの流れからして拓馬さんの所にかけたんだろうが。
「……あっ、お父様、わたくしです。実は大切なお話しがあるんですが……。え？　今は会議で話せない？　そんな些細な事は後回しにしてください。さもなければ絶好です。親子の縁を切らせてもらいます」
……なんか、話しの流れが非常にまずいんですが。
師匠に振り向くと、俺の言いたいことが読み取れたらしく、肩を竦めて「諦めなさい」と言ってくる。

何を諦めないといけないのかは疑問なところだが、師匠の言うとおりなるべく考えないようにしておこう。
「分かりましたね。今度このような事態になりましたら、わたくしも考えがありますから。……家を出るな？　それはお父様の今後の態度次第だと思いますよ」
く、黒い。拓馬さんに同情してしまうぐらい黒いよ。
いったい、神藤はあそこまで気持ちを高ぶらせているのだろうか。
「さて、と。少々いざこざがありましたが、話しを元に戻しましょう」
「あ、あぁ。正直、超展開に話しがついていけないって所だが、やっぱりお前は祐希……神藤祐希なんだな？」
「はい。正確には男の姿をしていたときの名前ですが」
「そうか。……お前は俺に真実を話すといったが、それは本当か？」
「相違ありません」
「俺が言うのもなんだが、数年……いや、もしくは一生隠すつもりの真実を、こうして土足で踏み荒らそうとしている。その事に抵抗はないのか？」
神藤はおかしそうに微笑む。
「相変わらず優しいですね、勇気。けど、貴方の性格上、私が隠しても嗅ぎ付け様としましたでしょ」
「お前相手にそんな事出来るか。だから、あんな宣告をしないといけないハメになってしまったんだぞ」
「つまり、あの『お前の正体とやらを聞きに行かせてもらうからな』って奴は一時的な感情任せの言葉じゃなかったと？　だどしたら、私は貴方の見方を変えなくてはいけないですね」
思案顔を見せる神藤に「その意見に関しては同意します」と師匠が横から割ってはいる。
「お嬢様の仰るとおり、見方を変えるべきでしょう。勇気が使用しようとした魔法はおそらく、闘の技である『稲妻落し』です。あれは旧日本に広く伝わっていた九字の魔法の一つ」

「えぇ、その点にはわたくしも驚きました。魔法は苦手と言っていたのに、九字の魔法が扱えるなんて……どうして黙っていたんですか？」
ジトー、と擬音が聞えるぐらいねめつけてくる。
隠し事をされたのがよっぽど気に食わない様子だが、隠し事に関してはお互い様だと思うぞ。
相手の秘密を打ち明かしてもらう立場としては、こちらも「秘密だ」と言えるわけないし、少々お茶を濁しつつ話すとしますか。
「あの魔法はいつかお前達に勝つ為に用意してきた切り札だ。ったく、中学から用意してきた切り札をこうもあっさりと台無しにされると気が滅入るな」
「中学からって……。そんな前からこの魔法を習得するのに注いだのですか」
「神藤なら分かるだろ？　旧日本の魔法は発動時間がバカ長い。だから使えないと評され、誰も使い手がいなくなった。けど、習得のし易さは他の国の魔法に引けの取らない簡単さだ。そこに光明を得るのは至極当然の話しだろ。……だが、ま。魔法の才能がない俺には習得するのに三年を有してしまったが」
技術大国と謳われている日本だが、やはり魔法の部類に関しては発展途上と言われがちな傾向がある。
日本がかつて発展されていた魔法の部類はどれも長時間の下準備と多くの道具の消費が必要とされている。
それに比べて魔法大国と表されている西洋の魔法は発動時間が比べ物にならないぐらい早い。その代わり、才能に左右されて習得できる魔法が限られ欠点がある。
猿真似大国とも言われている日本は西洋の優秀さを見習い自国の魔法を捨てて、直ぐに西洋の魔法に乗り換えた。故に、日本特有の魔法を継承している人間が限りなく少なくなってしまい、今では存在を知る者すら危うい。
「ま、俺の話しはどうでも良いんだ。それよりお前の話しだ、神藤。

……いや、この場合は優希と呼ぶべきか？」
「好きに呼んでください。何なら、マイハニーでもＯＫです」
「いや、それはダメだろ」
「そうですよお嬢様。そこはスイートを挟まないと話しになりません」
「師匠も何を言っているんだよ、無理して話をあわせなくても」
あ、意外そうな顔をしている。今のは冗談抜きの発言かよ。
「そうですね、奈々の仰るとおりでした。では、勇気。ここはマイスイートハニーとおよびください。私も雛ちゃんみたいにダーリンって呼ぶから」
「……人で遊ぶのも大概にしろよな。男のときならまだしも、今のお前を見てそんな事を聞かされたらマジになるからな」
「その時は急いで式を挙げないとね。奈々、常備婚姻届を」
だから人で遊ぶな。それと、そこのバカ師匠。
問題ありませんといいながら婚姻届をだすな。何処に隠し持っているお前は。胸元に隠すな、はしたない。
「さて、と。充分なアピールタイムは終わったことですし」
神藤の表情が真剣そのものに変わる。どうやらやっとの事で本番に入るようだ。
「先ずはわたくしのお部屋に移動しましょう。お話しはそれからって事で」

第１２話：優希（祐希）の秘密

行き成り話しはかわるが、俺が師匠に指南を仰ぎに行くとき、毎度通される場所は客人を持て成す為に使用されている客間である。

何でも新人の指導の訓練にも良いとの事で通されているらしいが、毎回出されるコーヒーは格別だったっけ。師匠の後輩である新人さんが入れているらしいが、今回はそのコーヒーはありつけないだろうな。流石に案内された場所が――。

「あ、あまりジロジロ見ないでください」

「す、すまない。あまりにも可愛らしい部屋で少し度肝を抜かれてな」

――祐希、じゃなくって優希……ええい、面倒だ。俺が案内された場所が神藤の部屋だったのだ。

「お嬢様は大のぬいぐるみ好きですからね。今度から何かを贈る時は是非とも参考にしてはどうでしょう」

「それで、神藤の誕生日なんかは女っぽい物を多く推していたのか」

今思えば、おかしいと思う点が一杯あったな。神藤の誕生日プレゼントを買うとき、参考に師匠に問うた時は「可愛い小物やらオルゴールなんかはいかがでしょう」と何かしらの理由を付けては強く推していたからな。

神藤が女性と分かってしまえば、数々の女々しい行動がしっくり来る。と言うよりも、思い出してしまうと可愛らしく感じてしまうから不思議だ。同じ行動でも男と女では感じるものが違うと思うと複雑な気持ちになるな、これは。

「やっぱり奈々の助言があったんですね。勇気が男だと思っていたわたくしに可愛らしいリストバンドやオルゴールを贈るから、もしかしたらわたくしが女だとばれているんでは、と冷や冷やしたときもあったんですよ」

「いや、恥かしながら全く気付かなかったな。女々しい奴と思って

はいたが」
　それだけ神藤の演技が良かったのか、あるいは――。
「単に勇気が鈍かっただけですね。私から見るといつばれても不思議じゃなかったと思いますよ」
「そうなんですか、師匠」
「むしろ、どうして気付かなかったんですか、と私は勇気に問いたいですね」
「た、タハハハ」
　耳が痛いお話しで。
　何も言い返せなかったので笑って誤魔化していたら、神藤が「まあまあ」と話しに割って入ってきた。
「むしろ、わたくしとしては勇気が鈍感だった事で幾分と助かった点がありましたので……。もっとも、わたくしの演技が酷くて夢野さんに多大なる迷惑をかけている点は否定できませんが」
　不意に飛ぶ夢野さんの名前に俺は表情に出していたのだろう。
　神藤が「フフフ」と微笑み、師匠に向けて「礼のものを」と頼む。
「では、本題に入りましょうか、勇気。先ずはそうですね……。何処から話していけば良いものか」
「正直に言わせて貰うと、神藤。お前の秘密はあまり興味がないんだ。ただ、それが分からないとこちらとしても対処の一つもつけないと思ってな」
「まるで、わたくしに興味がないと言いたげですね。そんなにロリ巨乳がお好きなんですか？」
「ばっ、今はそんなのはどうでもいいだろう。第一、俺はそんなつもりで言ったつもりは」
「そう言えば、勇気がオススメしてくる本やらビデオも何処となく夢野さんに似ていたような」
「いや、だから……ああ、もう！　ああそうだよ。確かに好みのタイプかも知れないが、あんな事態を見て何かをしてやりたいと思ったのは確かだよ。疚しい気持ちは半分しかないさ」

「半分もあるんだ」
「ええい、いいだろ！　少しぐらい考えても。それよりも、夢野さんはお前の秘密関連で色々と拘束されているみたいだ。その点で思い当たる節はあるのか？」
「あからさまに話しを変えられた事に色々と言いたい事はありますけど、今は彼女の事が大切ですね」
　それを最後に神藤の顔から笑顔が消えた。
「これはあくまで仮説なんですけど、名家の何処かがわたくしの秘密を嗅ぎ付けて、その、わたくしを許婚にしようかと考えているんだと思います」
「それは、お前と縁を持って神藤家の財産を得る為にって話しか」
「それならば話しは単純で良いんですけどね」
「なんだ？　他にも理由があるのか」
「欲しいのはたぶん、わたくしの子供だと思います」
「こ、子供？」
「姓名に神の名がつく者は何かしらの才能を持つ。それは勇気も知っていますよね」
「ああ。お前と師匠をみていれば、嫌って程理解出来たさ」
「おそらくは、夢野さんを脅している方も同じ神の姓名を持つもの。幾等、神の名を持つものが優秀な遺伝子を残すと言っても、外れる可能性もなくもありませんしね」
　神藤が言うには、いくら神の姓名を持つ者の血が優秀でも、もう一つの血が混ざり合ってしまうと有能性が下がる可能性があるらしい。
　その可能性を防ぐ為に、神の姓名を持つ者同士が交わる必要があるとか。何と言うか、犬や馬の交配の話しみたいで嫌だな。
「魔法が発展するようになってから、やはり血筋は大切にされていますからね。現にわたくしも、神の姓名を持つ方となるべくなら結婚するようにと釘をさされています」
「まるで、大昔の日本だな。血筋を残すための結婚……大河ドラマ

でよくある話しだ。それで」
「それで？」
「お前のことだ。もう、検討はついているんだろ？」
「流石ですね。いつも、それぐらい感が冴えてくれるとわたくしも助かりますのに」
嫌味の一つも呟き、軽く手を叩いて師匠の名を呼ぶ。
神藤の呼び声の五秒後にはいつの間にか消えていた師匠が現れ、抱えていた資料らしきものを俺に渡してくる。
受け取った俺は「調査結果」と簡潔に書かれている表紙を捲くると、それにあわせて師匠が解説する。
「お嬢様に頼まれ調査した結果、夢野彩香には昏睡状態になっている妹が一人おるらしいです」
「昏睡状態と言うと、植物人間常態か？」
「いえ、勇気の考えている昏睡状態とは多少違いますね。診断結果には呪縛とされています」
「と言うと、呪いの類か」
「おそらくは」
「……なるほど。呪いの類はそれなりに広まっているはず。なのに解呪出来ないとなると西洋の類と考えるよりも東洋の術と考えるべきか」
西洋と東洋の術の二つには色々と異なる点がある。
根底的に違うのは力の発生源。
自然の力を取り込み自分の力へと変換して生み出す西洋式が主流に対して、東洋式は己の元々存在する力を伴って生み出す。
変換型と放出型なんて括り分けされているが、殆どの人間が西洋式を扱っているため、東洋の魔法は殆ど知られていない。
「ご推察の通りかも知れませんね。……勇気、貴方ならその呪いの類を看破する事は出来るのでは？」
「無理だろうな」
師匠の現に間髪いれずに答える。

その答えの速さに流石の神藤も我慢仕切れなかったのか喰らいつかんと言わんばかりに詰め寄る。
「諦めるのが早すぎませんか勇気。貴方は九字の魔法だって使えたのに」
「九字の魔法と解呪は別物だ。それに呪いの魔法は俺にとっては高等レベルの魔法。習得出来たとしても半年は掛かる」
「なら打つ手は――」
「まあ、待て」
絶望に近い声を上げる神藤の言葉に被せる。
「先ずは様子を見るのが先決だ。ここであだこうだと言っても、水掛け論にしかならない。それに諦める必要はないはずだ」
「え？」
「俺が知っていた神藤祐希は紛いなく天才だっただろ？　もし、俺の知る東洋の術式ならば教えることが出来るさ」
ポカンと口を開いたまま目を点とさせる神藤。
意外だ、と言わんばかりの態度に少し違和感を感じたので、ひょっとしてと思い、師匠の方に視線を動かすと案の定、師匠はおかしそうに腹を抱えて笑うのを必死に堪えていた。
「まさかと思うが師匠？」
「ご、ごめんなさい。まだ、お嬢様には」
だと思った。道理で、さっきの師匠の言葉に何もピンと感じなかった訳か。
蚊帳の外に置かれている立場の神藤が「どう言うわけ？」と首を傾げながら問うて来る。
「……ま、詳しい事は後々に師匠に聞けば分かると思うが、東洋の術式は俺のテリトリーだったと今は言っておくかな」
まるで納得していないみたいだが、今はその辺で簡便してもらおう。
無理してこの話題を長引くのもあれなんで、そろそろ気になった話題に意向させてもらうことにしようか。

「ところでさ、神藤。そろそろ何で男装していたのか理由を聞いても？」
「……さっきから思っていたけど、何で神藤な訳？」
「はっ？」
「今まで見たいに名前で呼べばいいじゃん。それかマイハニーで」
「そのネタ、まだ続いていたのか。でもしかしさ、男の時は『ゆうき』で、女のときは『ゆき』なんだろ？　ちょっと俺としては直ぐに間違えそうだから、神藤で落ち着いたんだが」
「うん、即刻呼び名のチェンジを要求します」
「し、しかしな」
「じゃないと、協力もしないし、男装になった理由も話しません」
「な、なに膨れ面になっているんだよ。子供じゃあるまいし」
「知りません」
だんだん返答が子供化しているな。何処で地雷を踏んだんだ俺は。
「ほらほら、可愛い顔が台無しだぞ。いい女はそんな顔をしないはず。なあ、師匠」
「そうですね。お嬢様、呼び名は直ぐに変えろと言われても難しいので、今まで通りに『祐希』で続けてもらってはいかがでしょう。慣れてきたら、マイハニーでもマイエンジェルでも好きなように強制的に呼ばせましょう」
「ちょっ、師匠？　何か、だんだん呼び名がおかしくなっていませんか」
「それぐらい言わないとお嬢様の機嫌なんて治りませんよ。ね、お嬢様」
さっきまで膨れ面だったのに、今は「そうね」と呟きながら思案顔になっている。
もしかしなくても、さっきの表情は演技だったんだろうな。そこまでして俺に恥かしい呼び名を呼ばせたいのだろうか。
「まあ、勇気にそこまで期待するのも少し無理か。そうね、勇気。今までどおり、わたくしの事は祐希で良いわよ。でも、なるべくな

ら、二人っきりの時は優希がいいな」
「分かった、努力しよう。ハニー」
意趣返しのつもりで、少し恥かしかったけどお望みの言葉を言ってみた。
「なっ！？」
効果覿面って所か。一瞬にして顔が赤くなる。
何だよ。自分で呼ばせようとしといて、肝心の自分は免疫ないのかよ。
「そ、そんな事よりもわたくしの秘密でしたわね」
祐希は自分を落ち着かせるように咳き込み、俺のハニーの発言に触れる事無く話題を戻した。
「別にいいぜ。大方、拓馬さんが可愛いお前に変な虫が付くのを恐れて男装にもさせたんだろ？」
「か、可愛いって。……う、うん。まあ、半分はそうなんだよ」
「半分？　他の半分は違った理由なのか？」
「そうなんだ。その、あの、落ち着いて聞いてね、勇気」
「ん？」
「実は残りの半分は、わたくしが男装していると気付いた男性は、わたくしのお婿候補にするってお父様が」
「……は？」
何だそりゃあ。

第１３話：別に理由はなかった

簡潔に纏めると、祐希が男装している理由は二つに要約されるらしい。

一つは、祐希に悪い虫が付かないようにするため。この点は、祐希の本来の姿を見れば容易に想像付く答えだ。男の姿の時でもそれなりに注目を集めている。危ない奴は祐希の顔でコラを作る奴もいたしな。それだけ、そこらの女性とは顔のつくりが違うと評判を受けていたのにも関わらず、実は女性だったと聞けば、男のむさ苦しい団体さん方が集まるのは考えなくても分かる。それこそ、学園アイドルなんて単語が付くほどの人気を集めても不思議じゃないだろう。それは分かるのだが、問題はもう一つの理由だ。

もう一つの理由は、本人曰く、男装を看破出来た男は婿候補に挙げられると言う点だ。これが分からない。こんなことを決める拓馬さんの考えが俺には分からないが、きっと何かしらの理由があるのだろう。

そんな俺の気持ちを察してか、師匠が補足する。

「最も、その理由は旦那様がお嬢様に本気で見破られないようにする為に言った言葉ですから、あまり本気にしないほうがいいですよ」

「あっ、やっぱり？」

今ので何となく納得してしまう。

そうだよな。俺が祐希の秘密を訊くのにも「追い出せ」と師匠に命令した拓馬さんなら、そう言った理由で言わせるのなら納得がいく。

けど、そうなると……。

「なにそれ？　それじゃあ、わたくしが男装する理由って殆どないに等しいわけじゃないの」

本人の祐希が納得する訳がない。

だよな。自分の婿を決めるの試験の為に男装していたはずなのに、

そんなのは二の次だと知ってしまえば憤慨するのもおかしくない。
「それじゃあ、わたくしがお友達とファミレスで楽しくおしゃべりしたり、可愛い小物を見たり、途中でアイスクリームを食べるのを我慢しなくても良かったって訳？」
「やけに庶民染みた内容だが、間違っていないんじゃないか？」
「な、な、なっ！」
驚愕な事実発覚って所か。今更になって拓馬さんの不利益な情報を吐露してよかったのかと師匠を見る。等の師匠は楽しげに笑いながら「そろそろ旦那様にも覚悟をしてもらいませんと」と意味深な事を言ってくる。
「まぁ、青春の殆どを男として過ごすハメになってしまった事を考えると、同情の念しか抱けないのは確かか」
そう考えてしまうと、拓馬さんのフォローなんか出来るはずがないよな。
よっぽどダメージを受けたのか、祐希はガクリと擬音が付くぐらいの勢いで項垂れたかと思うと、勢い良く立ち上がり部屋から去っていく。
呼び止める暇もなく消えて行った祐希の後を追おうと思ったが、アイツの行く場所など検討も付かない。下手に動くと迷いそうだしな。
「改めて言いますけど、良かったんですか師匠。何気なく言いましたけど、祐希にとっては驚嘆以外の何者でもないですよ」
「さっきも言いましたけど、旦那様にも覚悟をしてもらいませんといけません。それに、このままではお嬢様は不利な戦いを強いられますしね」
「不利な戦い？　アイツ、知らない所で敵と交戦でもしているのか？」
アイツの敵に回る奴と言うよりも、アイツに敵が出来るとは思っても見なかったんだが。
そんな俺の発言が的外れだったのか、師匠は意味深な笑みを浮か

べて言った。
「そうですね。交戦中というよりも、これから交戦するかも知れません」
「なんだそりゃあ？」
「直に分かりますよ、直に」
「ふうん。……それよりも、師匠。実はお願いが一つあるのですがよろしいですか？」
「唐突ですね。なんでしょうか。試したい術の一つでもあるんですか？」
「いや、実は師匠の――」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「遅いですね、アイツ」
かれこれ既に一時間は経つと言うのに、祐希が戻ってくる気配はなかった。
「やはり、相当ショックだったんでしょうかね」
「だろうけど、爆弾を投下した師匠が平然とした顔でいるのは不思議で仕方がないんですが」
「いやあ、照れますね」
「褒めていないですからね。……これ以上長居すると迷惑なので、そろそろ御暇させて頂きます」
「お嬢様にはお会いにならないのですか？」
「お会いにどころか、その等の本人が帰って来ないでしょ。アイツに会ったらよろしくお伝えください」
「分かりました。後、例の件は少し考えさせてください」
「分かりました、良いお返事をお待ちしております」
では、と帰り支度を済ませた俺は、祐希の部屋から去ろうとした直後、勢い良く部屋のドアが開かれる。

ドア越しから現れたのは、今まで消えていた祐希であった。
「おっ、祐希。そろそろ帰らせてもらうよ」
「そう。なら、早く帰ろうか」
うん？
帰ろうか。何かイントネーションの違いに違和感を感じたのだが。
それに、その大量の荷物は一体。
「あの、お嬢様？　その大量に抱えているお荷物はいかように」
「奈々。わたくし、本日より勇気のご自宅にお世話になりますので、お父様にはそのようにお伝えください」
「「はっ！？」」
突然の家出宣言に俺と師匠が声をそろえて発していた。
いつも平然としている師匠もこれには度肝を抜かされたらしく、慌てて祐希の所に駆け寄り何とか説得を試みている。
「お、お嬢様。何卒、何卒冷静に」
「うるさい！　わたくしは決めました。もう、神藤家なんかにいられません。わたくし、今日から勇気の所に嫁ぎます」
「ま、待て待て待て。落ち着け祐希。お前、今、とんでもない発言を言っているのに気付かないのか。冷静に、そう！　師匠の仰るとおり冷静になれ」
それはそれで嬉しいが、俺はまだ拓馬さんに殺されたくないぞ。
「わたくしは冷静で、落ち着いています。家事洗濯なんでもします。大丈夫です、花嫁修業はばっちりこなしましたから。夜のお世話もばっちりこなせます」
「だから！　お前の発言を聞くとどう考えても冷静じゃないだろ！
感情的になるのも分からなくないが、取り合えず落ち着け。ほら、師匠も鼻血なんか出していないで説得してください！」
「す、すみません。お嬢様の夜の言葉に過剰に反応を――。そ、そんな事よりもお嬢様、勇気のご自宅に転がり込むなら、先ずは勇気のご両親の了解を取らなければ」
おい、何だか話しの流れが微妙に変わっていないか。

確かに、親父とお袋に話しを通さなければ、転がり込む事なんて出来ないのは正論だが。
「ふふん。そう言うと思って、既に根回しはしました」
ね、根回しだと！？
俺は慌てて携帯電話を取り出し、自分の家に電話をかける。
「……あっ、親父？　俺だ俺。いや、俺俺詐欺じゃなくって、てか古いなそれ。登録しているんだから俺の名義が出ているだろ、じゃなくって！　どう言うことだよ親父！　……は？　お嫁さんが出来て良かった、じゃなくって！　なに人の未来設計の話しをしているんだよ。だからそうじゃなくって、もう決まった事だから変更不可！？　お袋がそう言ったのかよ。孫は最初は女の子？　知るか、ボケ！！」
ダメだ。あのバカ夫婦。完全にその気でいるな。
第一、祐希が女であることに疑問を感じなかったのかよ。
ねめつける様に俺は祐希を見る。
「両親になんて言った。催眠術の類の魔法を使ってはいないだろうな」
「別に。今日から坂本優希としてお世話になりますって言っただけです」
……その一言でうちの両親はその気になったと言うのか。
もはや説得不可と判断。かくなる上は、師匠に力づくで――。
「お嬢様、本気なのですね？」
「当然。何なら、奈々。わたくしと一緒に嫁ぎます？」
ちょっ、何を言っているの君たち。
師匠も考え込まないで。軽く「冗談でしょ」と一蹴してください。
「そうですね、面白い考えですが……ご武運を、お嬢様」
「師匠！　なに、送り出そうとしているわけ！？　力づくでも何でもいいから止めてくださいよ。あなた、神藤家のメイドでしょ！」
「し、仕方がないでしょ。お嬢様がこう言って折れた試しなんて一度もないんですから。それよりも、勇気。お嬢様を傷物にしたら分

かっているでしょうね」
「だったら、尚のこと無理やり引き止めてください。いくら俺でも理性が耐えられるか」
ふと、俺の腕に何かに包まれる。不意打ちの出来事に、咄嗟に跳び上がろうとすると物凄い力に引き寄せられて無力化される。
柔らかく弾力のある物の正体が何なのやらと振り向くと、満面な笑みを浮かべる祐希がいた。
「それじゃあ、奈々。お父様にはお世話になりましたって。お母様には後に会いましょうと」
「分かりました」
分かりましたじゃねえよ。さっきまで反対していた師匠が何で物分りよくお辞儀しているんだよ。助けろよ。
祐希は物分りよい師匠の返事を聞いて満足そうに頷き、俺に向けて「じゃあいくよ」と短く「跳べ」と発する。
それは移動系統魔法の詠唱だったのだろう。一瞬にして視界が白く彩り、気がついたら俺の部屋に移っていたのだった。

第１４話：家出の援護人

……最近思う事がある。普段、何も起こらない平穏の日々の時、常日頃「何か面白い事が起きないかな」や「この研鑽した力を発揮できる場が欲しい」と思って止まなかった。何も代わらない日々に刺激が欲しくて、何も行動に移さないくせに「何か起こらないかな」と甘ったれな言葉を吐いていたかつての俺を今すぐぶん殴りたい気持ちだ。

失ってから初めて気付くとは正にこの事を言うのだろう。平穏でつまらない、なんて悩んでいた俺はなんて贅沢な悩みをしていたなと本気で思うよ。

「――勇気。何一人でぶつぶつ言っているんです？」

ぶち。今、俺の血管が盛大に切れた音を確認したぞ。

今の発言に流石の温厚な俺も堪忍袋の緒が切れたんだろうな。

俺は他人事のように俺の様子を伺うお嬢様に向って、可能な限りおなかに力を込めてほえた。

「全てはお前の仕業だろうが！！」

時刻は朝六時。

まだ、夢の住人と化している人には悪いと思ったが、怒鳴りつけずにいられなかった。

後でクレームが来たら潔く謝ろう。……賄賂もちゃんと用意しないとな。

「大体、何で祐希まで俺の後について来るんだよ！　後――」

視線を祐希の隣に動かす。何で自分が怒られているのだろう、と小首を傾げている祐希の横にいるはずのない人間が入れたてのコーヒーを頂きながらくつろいでいた。……一般市民の家にエプロンドレス姿は違和感しか感じないな。

俺の視線を追って察したのか、祐希も苦笑いしている。どうやら祐希の差し金ではなさそうだ。

俺達の様子に気付いたのか、等の本人は営業スマイルを浮かべ、自分の飲んでいたカップを差し出す。
「欲しいならそう言ってください」
「いや、いらないから。っと、待て待て。何、飲んだ直後に俺に近づこうとする！　貴方は何をしたいんですか――師匠！！」
特に顔！
顔をそんなに近づけないで頂きたい。
両肩を掴んで近寄れないようにすると、師匠は口に含んでいたコーヒーを飲み乾した。
「いえ、物欲しそうな目付きをしていましたので、てっきり間接キスか口移しがご所望なのかと」
「貴方は俺をどんなキャラにしたいんですか。師匠、今度ゆっくりと話し合う必要がありますね」
と、そんな事を言いたい訳じゃないんだよ。
掴んだ手を離し、距離を開ける。何をされても咄嗟に対処できる間合いまで後退し、再度問う。
「師匠。どうして貴方が俺の家に？　あっ。もしかして、拓馬さんに言われて、祐希を連れ戻しに来たんですか？」
それなら即効でこのお嬢様をつれて帰っていただきたい。
このお嬢様のおかげで俺が昨日の夜にどれほど苦労したことか。主に理性面で。
そんな淡い期待を抱いていたのだが、等の師匠は俺の期待を裏切るかの如くゆっくりと首を振って言う。
「残念ながら、そのようなご命令は受けていません。ただ――」
「ただ？」
「『優希一人にあの男の家に住まわせるな。奈々、すまないが、お前も一緒に向かい、優希の貞操を守るのだ』だそうです」
「……は？」
あの、イッタイナニヲイッテイルノヤラ。
空耳か。幻聴の類か。……きっと、疲れているんだろうな。おか

しな言葉を聴いた気がする。
そう言えば調子も悪いことだし、今日は学校をサボ――。
「奈々。流石にそれは勇気のご両親に迷惑よ」
――はぁ。分かっていたさ。幻聴でも空耳でも、疲れて耳がおかしくなったわけでもないって事にさ。
けどさ、祐希。その発言はお前が言える立場じゃなくないか。
「そう思い、奥様からとある物をお預かりになりました」
「お母様から？」
はい、と肯定した師匠はエプロンドレスのポケットからとある物を祐希に差し出す。
渡した物は小さなノートのようなものであった。
「これは？」
「通帳でございます」
「いえ、それは分かるのですが」
「いくら勇気のご両親が親切でも、人一人向い入れるのに金銭的負担は免れません」
「そ、そうね。それは見落としていたわ」
「はい。ですから、金銭面で負担をかけない為に」
「生活費を渡すって事ですね」
おいおい。貴方達、本気で俺の家に居座るつもりなのか。
祐希に続いて、師匠もかよ。じょ、冗談だよね。
「あ、あの師匠？」
「何ですか、勇気」
「あの、その。お気持ちは大変嬉しい限りなのですが、その前に、拓馬さんは何も言わなかったんですか？」
あの人が何も言わないとは到底思えないのだが。
しかし、今の話しの流れを聞く限り、
「はい、問題ありません。旦那様は多少渋っていたけど、奥様が『可愛い娘に駆け落ちさせろ』って言うじゃない、と説得なさって」
「待て、何だ激しく願望が見え隠れする説得の言葉は」

「奥様も一度は経験したいと仰っていましたね」
「知るか！　そんな事で、大事な娘を何処の馬の骨かも知らない男の家に行かせるなよ」
「――勇気、それは違うよ」
俺がツッコミを入れていると、祐希が俺達の話しに割って入ってくる。
何処となく不満げな顔をしつつ、腰に手をあてながら言った。
「わたくし――ボク達は親友だろ。その親友が自分を馬の骨なんて自虐的に言わないで欲しいものだ」
「……お前、こんな時に親友なんて言葉を使うのは卑怯だぞ」
それに、今までの知っている祐希の口調で言うのもだ。
確実に狙って言っているのが丸分かりなのだが、そう言われてしまうと何も言えないじゃないか。
「ゴメン。でも、ボク――わたくしとしてはこのままここに居たいのですが、やっぱりダメですか？」
ひ、卑怯だ。絶対に狙ってやっているなこいつ。
男が女のお願いに弱いって、以前に三山議論したから知っての上で、そんな懇願する態度を取っているな。
ご丁寧な事に目を潤ませてやがる。
……へっ。だが、甘いな祐希。それは一部の男の話しで、全部の男がその女の妙技に弱いとは限らないんだぜ。日本人がノーの言えない人間だとは思わない事だな。そう、何を隠そうと俺は数少ないノーと言える日本人なんだから。
うん。はっきり言ってやるぞ。
俺は大きく溜息を一つ付いた後に、言ってやった。
「……好きにしな」
うん。
やっぱり、女の妙技に勝てる男など居るはずがないんだよ、こんちくしょう。
「あ、ありがとうございます！」

お許しを貰った祐希が花開いたかの如く笑みを浮かべて、腰を深々と折る。
「これから毎晩が大変そうですね」
っ！？
耳元で囁かれた言葉に衝撃を覚える。
慌てて声主――ニンマリと口端を曲げている師匠に向ける。
「し、ししし、師匠？　まさか、昨日の夜」
「さぁ？　何の事ですか、勇気。私は何も見ていませんよ」
嘘だ。絶対に嘘だ。
「どこから見た、どこまで見た！」
「そんな事よりも、朝の鍛錬の時間がなくなりますよ」
「話を逸らすな、師匠！　言え、言うんだ。たのむ、言ってください！」
まさか、全部見聞きされている訳ではあるまいな。
昨日の夜の出来事を……。

第１５話：回想の顛末

視界に映るのは見慣れた景色。
部屋の大半を支配している本棚。そのどれもが魔法関係の書物によってぎっしりとつめられている。
机の上に乱雑に置かれているノートの数々に、その周りにクシャクシャに丸め込まれた紙屑。
お世辞でも綺麗とは言いがたい散ばった部屋は間違いなく俺の部屋であった。
「えっと、その……。少しは片付けようね」
俺の部屋の有様を見て、祐希が遠慮がちに言ってくる。
言いにくそうに言う姿を見て、言葉を選んで言ったんだろう。苦笑いしているし。
「自覚はしている。……が、先ずは言いたい事があるんだが」
「うん。何かな？」
何かな、じゃないだろ。
俺が言いたい言葉が思いつかないのか、それとも理解しても理解していない不利をしているのかは定かではないが、小首を傾げて問う姿を見て、思わず溜息を漏らす。
「本気なのか、祐希。いくら親友だからと言って、女性が男の家に軽々と来るものではない。ましてや、泊まるなんてもってのほかだ」
あまりの理不尽な拓馬さんの判断に怒りたくもなるのは無理もあるまい。
祐希だって女性だし、女性らしい事もして見たいと思うのも当たり前の話し。
それを全て拓馬さんの我侭に近い言葉で出来なくさせられてしまったのだ。青春を邪魔された腹いせに困らせてやりたいと思うかも知れないが、それでも勢いでやっていい事と悪い事がある。
特に見目麗しい女性が男の家に単身で乗り込んでくるのなんて、

飛んで火に入る夏の虫状態と言っても良い。
「へぇ」
感嘆の声を上げる。
どことなく嬉しそうにしているのは気のせいか。
「な、何だよ」
「ううん。ただ、わたくしを女として見ているんだな、って」
「なっ！？　そ、そんなの当たり前だろ。どう見ても今のお前は女だろうが」
「そうだね。けど、わたくしが女と知らないでドレスを着させたら、どんな態度を見せたのかな？」
「そ、それは」
楽しげに訊いてくる。
そ、そうだったな。こいつ、今日の出来事を共感――対象の五感を共有させる事が可能な魔法――を俺に使っていたんだからな。
夢野さんとの打合せも、俺が一人呟いていた事も全て把握済みのはず。つまり、全ては筒抜けというわけか。
言われて初めて気付いたが、俺が祐希を女と知らないでドレスを着させていたらどんな態度を取ったんだろうな。
あまりの可憐さに思わず見とれるかな。いやいや、それは絶対にない……と、言い切れない俺がむなしい。
なにせ、先ほどの祐希の姿を見て見惚れていたから、何の説得力の欠片もないし。
「で、どうなの？」
ずいっと迫ってくるな。
真剣な表情で訊いてくる場面じゃないぞ、ここは。
「そ、そんな事よりも飯にしないか。両親には既に言っているんだから、飯の支度も出来ていると思うし」
答えられる訳もなく、逃げの一手を打つ。
そんなこと本人を目にして答える事なんて出来るわけないしな。
それに、帰って直ぐに出たから腹が空いているのは嘘じゃないし。

「ぶー」
あからさまの逃げの一手に祐希が不満げに頬を膨らませる。
てか、そんな顔もするんだなお前。俺の知っている祐希はそんな子供染みた態度を見せたことはなかったんだが。
やっぱり、男装の時は多少ながら無理をしていたんだろうか。していたんだろうな、たぶん。
たく、拓馬さんも娘可愛さにバカをやらなければ良かったのに。
「膨れるな膨れるな。可愛い顔が台無しだぞ。ほら、メシメシ。恐らく親父とお袋の事だから――」
先ほどの祐希の言葉を真に受けているとすれば、あの両親のこと。次に取る行動など手に取るように分かってしまう。
天然と言うか、幸福を背負って生きていると言うか、こう言った特別なイベント事に大げさに反応を見せる両親だからな。
きっと、両親が起す行動は――。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「やっぱり赤飯かよっ！！」
テーブルに並べられている料理のメニューを見て、思わず声を上げずに居られなかった。
やはり、祐希の言葉を真に受けているのか、普段では考えられないクオリティーの高さ。挙句にテーブルの中央には「おめでとう」とデカデカ画かれているショーとケーキ。あれって、ワンホール（しかも四号の大きさで）一万近くしているケーキ屋の奴じゃなかったか。
料理の品々を見て、表情を歪ませている俺に対して、隣に居る祐希は目を輝かせている。
「わぁ、お母様。これって、ミルフィースイーツのケーキじゃありませんか！？」

お、お母様！？
お前、お袋になんて呼び名で呼んでいるんだよ。
ツッコミたいんだけど、俺がツッコミを入れるよりも早く、料理――シチューを運んでいたお袋が微笑みながら「そうよ。優希ちゃんの為に奮発しちゃった」と明らかに浮かれた声で返す。
「しかし、ようやくバカ息子にも彼女が出来たのか」
と、感慨深い声を上げるのは既に席に座っている親父であった。
俺に彼女が出来た、と言う所に色々と言い返したい言葉があるのだが、既に缶ビールを三本も飲み干している親父に何を言っても意味がないだろう。酒好きなくせに直ぐに酔うからな親父は。
「もう、好きなように言ってくれ。正直、言い返すのも疲れたぞ」
どうせ、俺の味方をしてくれる人などこの場にはいないんだ。孤軍奮闘なんかするよりも、この場は潔く投降するのが吉だ。
反論せずに席に座った俺を見て、親父は無言で俺のグラスに烏龍茶を注ぎ込む。珍しい事もあるものだな。いつもなら、無理矢理でもビールを飲まそうとするのに。
「あっ、お母様。わたくしも手伝います」
俺が席に座ったのを見計らって、直ぐにお袋の所に歩み寄る祐希。
そんな祐希の背中を見送った親父は、ニンマリと口端を曲げて俺を見てくる。
「しっかし、やっとの事でお前も分かったんだな」
「……それはどう言う意味だ、親父」
こと何気に言い放った言葉に、引っ掛かりを覚える。
まさか、この酔っ払い親父は祐希（男）が優希（女）だった事を既に見破っていたと言うのか。
小学時代に何度か対面しているとは言え、逆に言えばそれぐらいだ。間近にいた俺ですら分からなかったのに、数回しか会っていない親父達は既に見破っていたとでも言うのか。
親父は俺の内心の言葉を知ってか知らずか、得意げな顔を見せて高らかに「なに。まだまだ俺も青臭いお前に負けるられないって訳

さ」とばか笑いを見せる。
「で、今日は一丁やるのか？」
「やるって何がだ」
「何って分かっているだろう。若い男女が同じ屋根の下でやることと言ったら一つしかないだろ。なぁなぁ」
「下品な事を言うな、クソ親父。大の大人が若い男女に過ちを進めるんじゃねえよ」
自分達が学生結婚したからと言って、息子の俺も同じだと思ったら大間違いなんだからな。
てか、同じ道に進ませようとするな。知っているんだぞ、俺は。結婚を反対させられて、駆け落ちして結婚したって事を。
何気に気になっているんだからな。俺の姓名が本当は坂本じゃないって事をさ！
「あら。過ちなんて、それはちょっと違うんじゃないかな」
「そこで、お袋まで便乗したら話しが収拾付かなくなるから、受け付けません」
当たり前のように「違うよ」反対しながら料理を置くな。てか、マジで料理が多くないか。これで何品目だよ。
これで最後だったのか、鳥の唐揚を山の様に積まれている皿を置く。
「ん？　祐希はどうしたんだ？」
祐希が来ないのにも関わらず、お袋は既に親父の横に座っている。
「直ぐ来るわよ。期待して待っていなさい」
「期待？　お袋、あんた祐希に何をした」
「まぁまぁ、直に分かるわよ。――優希ちゃん、そろそろいいかな？」
台所に向って言う。
直後「はい」と祐希からの返事が来る。
声色から緊張しているような気がする。その理由は直ぐに理解出来たが、率直に言わせてくれ。

「――おい、お袋。どうやって、あれを手に入れた？」
「ふふ。どう？　似合っているでしょ」
「そりゃあ似合っていないかと訊かれれば、滅茶苦茶似合っているさ。だけど、俺が言いたい事はそんな事ではない。どうして、うちの女性用の制服をあんたが持っているのか訊きたいんだよ。しかも、ご丁寧にエプロンまで付けさせて、あんた何気に狙っていただろ！」
もう嫌だ、この両親。絶対に確信犯で俺の理性をぶっ壊そうとしているよ。
不貞腐れる俺を見て、おずおずとお袋に視線をやる祐希。不安な表情を見せる彼女にお袋は「照れているのよ」と楽しげに言う。
「何せ、勇気が愛用しているシチュエーションに合わせたからね」
「やっぱり確信犯かよ。てか、どこでそれを知った！」
ガバッと起き上がり、勢い良く立ち上がる。
人の性癖をピンポイントで突いて来ると思ったらやっぱりか。
「勇気、貴方ね。隠しておきたいなら少しは部屋を片付けなさい。本棚の裏に隠してあってもバレバレよ、あれじゃあ」
「それに、勇気はボクだった頃に力説していたからね」
そ、そうでしたね。祐希が男だと信じていた頃、さんざんに制服とエプロンの凶暴性を力説したっけ。
てか待てよ。色々と祐希にはまずい話をしてしまったような。
……冷静に考えると、実は俺ってかなりまずい状況なのでは？
「ささ、勇気。突っ立っていないで食べようよ。折角の料理が冷めちゃうよ」
「あ、あぁ」
いつの間にか俺の隣に近づいてきた祐希に促され、再度、席に座りなおす。
俺が座った直後に祐希も席に座り、四人同時に箸を取り「いただきます」と声が重なる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「――随分と楽しそうにお食事なさっていましたね」
「やっぱり、そこから見ていたのかよ」
「はい。ご両親と和気藹々とした食事風景に、嬉恥かしい混浴シーン。それに初夜の顛末を一分一秒見逃さず、このカメラに録りました」
「い、いつの間に。てか師匠。それだったらさっさと助けてくれても良かっただろ。見ろ、この隈を。知っていると思うけど俺は一睡も出来なかったんだぞ」
「そうですね、かなりがんばっていましたね。回想しますか？」
「するか！」

第１６話：先手の指名者

油断していた。というよりも、昨日の衝撃が強すぎて、全く記憶の片隅にも留めていなかった。

あれから朝の鍛錬を終えた俺達は、師匠と母親が合作した朝食を済まし、あろう事か男装状態の祐希と共に登校してしまったのであった。

そんな状況をあの四人、祐希ラバーズなんかに見られたら、結果は考えなくても分かっただろうに。

てかさ、四人同時に奇襲とか反則だろ。

その結果、昨日の事件で気を取られていたと言う事もあり、いつものように避ける事も出来ず、無防備のまま四人の嫉妬の攻撃を受けるハメになってしまった。

その為、全身のあちこちに生傷を負った俺は、教室に付くなり机に突っ伏せるのは当然の帰結。

「だ、大丈夫？」

心配げな表情で尋ねてくる夢野さんに俺は軽く手を振って「大丈夫」と答えた。

いてぇ、マジいてぇ。久々のダメージに身体のあちこちが悲鳴を上げている。

不思議な事に致命的なダメージは負っていない事に不思議に感じてしまう所だが、あの四人も紛れもなく才女なんて呼ばれている程の逸材だしな。俺に対する攻撃の強弱を心得ていると言っても良いが。

「しっかし、お前にしては珍しいな。ここ最近、ラバーズの攻撃なんてヒョイヒョイって感じで避けていたのに」

しげしげと、俺が彼女達から受けた傷を見ながら言う真吾。痛々しい姿に顔を歪めている。

ちなみに、真吾が言うラバーズとは言うまでもなく祐希に好意を

寄せている四人――檜姉妹と副会長と雛菊さん――の事を指している。
「たはは。さすがに四人同時攻撃は始めてだったからな。不幸中の幸いと言うか、受けたのが初級の魔法程度で助かったけど」
それでもこの有様か。致命傷はないとは言え、両腕のダメージは酷いな。打撲程度で済んだとは言え、当分の間は重たい物を持つのも難しいか。
急所――目や股間――を避けてくれたのは情けだろうか、その辺りのダメージが一切ないのは唯一の救いだな。
「けど、ひどいよ。いくらなんでもやりすぎだよ。先生とかご両親には何も言われないの？」
「ん？　あー、言われた事はあったかな」
もっとも親父達には、それぐらい避けられないでどうする、って逆に怒られたが。
教師陣は教師陣であの四人に対抗する術を持っていないらしく、見て見ぬ振りが多いからあてにはならないしな。そのおかげで面倒くさい問題にならないでこちらとしては大助かりしていると言えるが。
そんな俺の他人事のような態度が気に入らなかったのだろうか、夢野さんは鸚鵡返しで「あったかなって」と呆れた声を上げたと思うとキッと両目を細める。
「そう言うのはもっとはっきりと言ってあげないとダメだと思うよ」
「はっきりねぇ」
真吾を見る。俺が何を言いたいのか察してくれたのか、苦笑して肩を竦める。
「神藤君も神藤君だよね。友達がこんな目にあっているのに、自分は女の子とよろしくやっているって訳！？」
「確かに見方次第ではそうとられても仕方がないが、アイツもアイツで色々と苦労しているんだよ。今だってあの四人をなだめるのに必死になっているだろうし」

何で俺が祐希の弁護をしているんだろう。普通逆じゃないか。
俺が祐希を罵倒して、夢野さんと真吾が弁護するのが本来の姿だと思うんだが。
……まぁ、アイツの秘密を知らない二人にとってはある意味、その見方は正しいのかも知れないな。
実際、今の祐希は神藤優希としてじゃなく、神藤祐希として未だにこの学園に通っているんだ。
本人的にはキリが言い夏休み後にでも元に戻りたいと言っている。
それまでに拓馬さんを説得して便宜を図ってもらう手配をしてもらわないといけないんだが。
その時、あのラバーズ達がどのような反応を見せるんだろうな。その辺は今から考えても仕方がないかな。最も、今までと変わらないなんてオチにもなりかねないが。
「まーまー。夢野さんもそんなに熱くなるなって。こいつはいっつもこんな感じだしな」
「しかし」
間に割って弁解する真吾に対し、夢野さんは納得いかないと言わんばかりに不満げな表情を見せる。
きっと、心優しい子なんだろう。理不尽に見える暴力を見て、同情してくれたんだろうな。
「ま、俺としては問題ないさ。最近ではこの痛みが癖になっているしね」
もちろん嘘だが、そんな冗談の一つも言わないと空気が重苦しくていけない。
「あっ、やっぱりか？」
おい待て真吾。
何だその「やっぱりか？」って。
「最近うすうす感じていたんだが、自覚していたんだな。どう思う、夢野さん？」
「どう思うって、私は遠山君が何を言いたいのかしゃっぱりだよ」

しゃっぱりって、いま舌を噛んだよね。
思いっきり動揺しているんだが。顔も林檎のように真っ赤だし。
「なるほど。夢野さんはムッツリ派か」
「ちょっと待とうか、遠山君。今、私の尊厳を著しく下げる発言をしたよね」
「なに、安心しろ夢野さん。女性の大半はムッツリ派だ」
勝手に決め付けるな。全女性陣を敵に回す発言だぞ。
「ちなみに家の妹なんかガチのムッツリ派だぜ」
「誰もそんな事は聞いていないんだが」
てか、お前に妹なんかいたんだな。
わなわな、と身体を震わせている夢野さんを放って、俺達は未だに到着していない祐希の机を見る。
「アイツ、まだ教室に辿りついていないようだな」
「みたいだな。てか、いつもの如くラバーズに捕まっている……だけなら、ここにお前はいないか」
そんな事で納得をしないで貰いたいものだがな。
真吾の納得の声に「どう言うこと？」と、唯一察すことの出来ない夢野さんが問う。
「簡単な話し、神藤に関する事によく巻き込まれるんだよ。可哀想なぐらいに」
「可哀想とか言うな」
祐希と親友と言うだけで目の仇にされるからある意味仕方がないんだぞ。
特に女性陣からのちょっかいは酷いもので、ラバーズのように容赦なく魔法をぶっ放すのが当たり前になってきているからな。
そう思うと、卒業まで無事に生きていられるんだろうか。
俺達の会話を横から聞いて、何を想像したのか知らないが夢野さんの顔が青白く彩り始める。
「た、大変だったんだね」
「大変だったってもんじゃないさ。ここ最近の話しなんだが――」

って、どうして真吾が嬉々となって俺の黒歴史を説明するんだが。
黙って成り行きを見守っていると何を言われるか分からないので、話半分の所で頭を殴りつけて強制的に話を中断させた。
「ってぇ。何をする！」
「なに人の黒歴史をお前が説明しているんだよ。あれか？　実は前々から夢野さんに目をつけていたのか？」
物凄く活き活きとしていたからな。もしかしてと思ったが、予想に反してシレっと「違う」と言われる。
その横で突拍子もなく自分に気がある発言を耳にした夢野さんが、今度は顔全体が真っ赤に染め上がり「あわわわ」と口にして狼狽していた。その姿に内心「萌」と口にしたのは内緒である。
「それを言うならお前の方はどうなんだよ。昨日の放課後とか二人っきりだったみたいじゃないか」
さっきの御返しと言うわけか、顔をニンマリと悪い顔を作って言い返してくる。
何を言うかと思ったら。
「それこそ違うと言うものだ。誰もがマジックダンスを立候補しないから、こちらとしては対策を練らずにいられなかったんだぞ」
「あー、あのＭＤね。そう言えば出場者は決まったのか？」
「いやまだだが。そのＭＤは略称か何かなのか？」
「そうそう。まぁ、略称の決め方としてはお約束って感じかな。でさ、出場者が決まらないんなら」
「おっ？　なんだ、お前出るか真吾。何なら、女性の目処は俺がつけてやらなくもないぞ」
「バカ言え。大体、お前に紹介できる女がいるのかよ」
「んー、それを言われると痛いな」
そう言えば、昨日の事で頭が一杯だったせいでマジックダンスの話しを祐希にしていなかったな。
今のアイツならば女性として出ろと言えば二つ返事でもらえなくもない気がするのだが、楽観視は出来ない。

ここは保険として何人かの参加の意思を取りたいところなのだが。
「そ、その事なんですけど。女性の方なら何とかなるかも知れません」
「それ本当、夢野さん」
「はい。私の友達なんですが……」
「名前を聞いてもよいかな。早速出場依頼の話しをしてくるから」
予想だにしなかった嬉しい誤算に俺は無意識の内に夢野さんに詰め寄っていた。
俺の態度に若干ひき気味の夢野さんは言いにくそうに「それが……」と言葉を続ける。
「その子が言うに一つ条件があるそうです」
「条件？」
「はい。相手を指名させて欲しいとの事です」
「あー、なるほど」
それは中々難しい条件だな。
その子が良いといっても、相手が了承の言を貰えなければ同時にその子も出場したくないと言っているものだ。
説得ぐらいは出来るが、相手にもよるよな。
祐希のようにお人よしもいれば、その逆で捻くれものや堅物者もいる。
せめて彼女が言う相手が説得しやすい奴ならいいが。
「確約は出来ないが説得はしよう。それでその子が言うご指名の人物は？」
えっと、と言い難そうに表情を歪ませる夢野さん。
その表情からして、説得しても無駄な人物かなと内心苦笑していると、
「あなたよ、坂本君」
……どうやら、今年はビックリドッキリ期間のようだ。予想、いや想像すら出来なかった一言を貰い、俺は隣で驚嘆の声を上げる真吾に向けて言う。

「あー、真吾。どうやら俺、未だに夢の中みたいだ。早く起きないと遅刻するかも知れないから、遠慮なく思いっきり撲ってくれ」
「奇遇だな、坂本。俺も未だに面白くない夢を見ているようだ。俺も遠慮なく思いっきり撲ってくれ」
「そうか、では遠慮なく――」
俺達は同時に席を立つ。互いに拳――真吾は左手で俺は右手で――を固め、互いの頬みどおり遠慮なくぶん殴った。
互いの拳はすれ違う様に相手の顔面目掛けて飛び、拳が接触する直前で二人の拳が寸止めの要領で止まる。
「って、何で俺が真吾に撲られなければいけないんだよ」
「お前が最初に言ったんだぞ、坂本。俺はノリでそう返しただけだ」
「だからって普通、そこまでやる必要はないと思うんだけど。しかもクロスカウンターなんてよく出来るよね」
一連の俺達の成り行きを見ていた夢野さんから呆れる言葉を貰い受ける。
この一連の元凶を生んだ彼女に言われたくもないが、周囲からの注目も浴びている最中、反論を言い返せず、俺達は黙って着席する。
「それで、夢野さん。坂本をご指名する物好きって誰なんだ」
「おい、誰が物好きだ誰が。そして、当事者でないお前が何故にそんな良い顔をする」
「他人事だからに決まっているだろ。それで、誰なんだ？」
しつこく訊く真吾に押されつつ、夢野さんは周囲を見やり、俺を指名した本人を探す。
「窓際の一番後ろの席にいる子です」
俺達は廊下側の真ん中にいるから、反対側の後の方の席か。
「窓際の一番後ろって……まさか」
俺達よりも早く相手を確認した真吾は、今日で何度目かの驚嘆の声を上げる。
そして「やったな」と肘で俺の脇を突き始める。
真吾の態度に頭を傾げる俺も尻目で相手を確認し、思わず「そう

来たか」と口にしていた。
「坂本君は確か話した事がなかったよね」
俺は首肯する。
「お昼に紹介するけど、彼女は――」
工藤飛鳥。
それが俺を指名した敵の名前であった。

第17話：待ちナース

自慢ではないが、俺の交友関係はそれほど広くはない。
クラスの中でも普段会話をする人間だって真吾と祐希ぐらいだったし、学級委員に指名されなければ夢野さんと会話すらしていないだろう。
つまり、俺は敵の一人であろう人物、工藤飛鳥の事を何も知らない。
まぁ、クラス替えをしてまだ一ヶ月しか経っていないし、クラスメイトの名前や顔を知らない人が多数居ても仕方がないとは言え、相手の情報を全く持たずに対峙するのは避けたい所だ。
なので、彼女を知っているであろうと思われる人物、先ほど「やったな」と意味深な言葉を吐いた真吾に訊いて見た。
「は？　工藤飛鳥の事を知りたいって」
言うなり妙に驚かれたが、俺は気にせずに「そうだ」と返答した。
何を思ったのか、真吾は溜息を一つ吐いて、ルーズリーフを一枚取り出す。
「いいか。この学園には人気の高い女性はランク付けされているらしい」
「らしいって。って、行き成り唐突に何を言っているんだお前は？」
「良いから話しを最後まで聞けよ。まぁ、お約束として各学年の四人を四天王とか何か言っている訳よ」
「……それを呼称付けた奴は何てネーミングセンスが乏しいんだ」
明らかに登場した後、打ち切りされそうな名前じゃん。
倒した後に「俺達の戦いはこれからだ！」と意気揚々と宣言するのか？
「それで？　大体話しは見えたが」
「予想通り、三年の四天王には副会長こと天野向日葵が、二年の四天王には檜琴音と水樹雛菊が、そして一年の四天王には檜茜がラン

ク付けされている」
「ちなみにそのランク付けとは何に対するランク付け何だ？　やっぱり――」
「女の魅力ランキング。もちろん、学園の男連中が勝手にアンケートを取り、集計をした結果だ」
……それって、ミスコンと何ら変わりなくないか。
「んで、その話しからして工藤飛鳥も」
「あぁ、彼女もその一人だったりする」
「やっぱりか」
俺はチラッと彼女を尻目でうかがう。確かに美貌で言えばあの祐希ラバーズに負けず劣らずて言ったところか。
黒縁の丸眼鏡が印象的であり、読書をしている姿は確かに絵になる様であった。
「噂では医者の家系とからしく、成績も常に上位に居ることが多いらしい。最も、あの神藤に勝った事はないがな」
だろうな。読んでいる本も随分と分厚い本を読んでいるしな。題名からして医学的な書物といったところか。そんな書物を瞬く間の勢いでページを捲っている姿は圧巻の一言しかなかった。
色々と驚かされる情報はあったが、相手を知るという意味では少々弱いところである。
「他には？」
「他には、というと」
「だから、得意な魔法とか、魔法特性なんか。後、彼女の人となりなんて分かれば是非の知りたいところだな」
俺がそう言うと、何をどう思ったのか真吾が不気味な笑みを浮かばせる。あの顔は変な勘繰りをした時の表情だな。
「そうかそうか。お前、さっき夢野さんに言われて多少となり意識しているんだな」
やはりと言うか、そう言う勘繰りをするんだな。
男と女ってだけで、惚れた腫れたって……。

さて、どうするか。真吾に事情を話して仲間に引き込むのもありと言えばありだ。
こう見えて思慮深い男で、実力も引けを取らない人物である。頼めば二つ返事で答えてくれるが、なにぶんこいつはお人よしだ。
協力を惜しまないいい奴とも言えるが、その分無茶をする事も多々あった。あまりこいつの力に頼るのも申し訳ないか。
悩んだ末――。
「そうだな。柄でもなく少しは意識しているのかもな。そんな友人に少しは情報をくれても罰は当たらないんだろ？」
「おっ、珍しく同意したな。そんな友人に情報を提供してやろうと思ったんだが、あいにく俺もあまり知らないんだよな。ただ」
「ただ？」
「彼女が『凍りの瞳』なんて呼ばれているのは専らの噂だぜ」
……この学校はいつからチュウニ病に犯され始めたんだろうか。

＊　＊

昼休み。待ちに待った対面の時が来る。
「昼だな。坂本、今日はどうするんだ？」
鐘が鳴り終わると同時に、俺の席に近寄るのは真吾であった。昼の買出しは学生の俺達にとっては戦争に等しい争奪戦となる。
人気の高いメニューと言うのは当然存在するし、皆が皆、それに有り付こうと必死になるのは当たり前。なにぶん、学生メニューと言う事もあって近くのコンビニで購入するよりも若干であるがお手頃の価格で買えるメリットがあると言うのも魅力の一つである。
その為に、やっぱり最初に言ったとおり、人気の高い物は争奪戦が勃発するのは自然の流れなのだ。それを攻略するのには一人では無理なため、こうして真吾と時たまにタッグを組んで買いに行く事が多かった。

「わりぃ、真吾。今日は――」
「まぁ、そうだよな。あんな事を言われた手前買いに行けないよな」
「悪いな、真吾。それから等分の間は昼は弁当になりそうだわ」
言った直後に、カバンに入っていた包みを取り出す。
「弁当か。何だ、倹約でもし始めたのか？」
「あいにく、俺は料理がからきしダメなのはお前も知っているだろ。お袋が偶にって作ってくれたんだよ。と言うことで、悪いな」
真吾は「仕方がない」と諦めると早々と教室から退場する。アイツの昼食はほぼ毎日菓子パンだったからな。
食堂で買う事が出来なければ必然的に昼食抜きになるから、そりゃまあ必死にもなるか。
「さてと」
うるさい奴が居なくなった所でこっちも本腰を入れて、今日のメインイベントに馳せ参じますかね。
久々にヤル気を出して席から立ち上がった瞬間――。
「（行くんですか？）」
と、問われた。棒立ちのままでいると怪しまれるので、ゆっくりと座りなおし周囲に悟られない様に机に放置してある弁当箱を開いた。
頭に直接響く聞き慣れた声に思わず「出鼻をくじくなよ」と声に出して愚痴ってしまったのは自分としても迂闊だったと反省している。
「（ごめんなさい）」
てか、何故に口調が令嬢時になっているのかね。
「（謝るなら行き成り話しかけないでくれないかな。てか、色々と突っ込みたい事があるが、先ずはこれだ。何時俺に共感の魔法を掛けた、祐希！）」
相手の五感を共有する魔法は軽々ホイホイと使える魔法ではなかったはず。それに、この魔法は相手に接触して初めて掛ける事が可能な魔法だったはず。持続性ももって一日保てば称賛されるレベル

だ。
「（えっと、乙女の必殺技って事で）」
「（答えになってないぞ、それ。だが、この魔法を俺に掛けたって事は大方の事態は）」
「（はい、存じ上げております。行くんですね？）」
「（ああ。事態を知っているなら話しは早い。お前は当分の間、この話しに関わるんじゃないぞ）」
「（大丈夫なんですか？）」
「（正直大丈夫とは言いがたいが、お前が関わるとあの四人も関わってくるんだろ？）」
当然、あの四人とは祐希ラバーズの事を指している。
「（それは……）」
「（事を大きくさせたくないのはお互い様だ。なら、先ずはご指名された俺が行って様子を見るのが定石だろ。違うか？）」
「（……何か、勇気。妙に生き生きしていない？）」
「（そうか？　そうかも知れないな。お前の為に磨いた力をようやく発揮させる機会を得られたんだからな）」
「（っ！？　勇気、それってどう言う――）」
何やら祐希の体温が一気に上がった感覚を得たんだが、向こうで何かあったのだろうか。
祐希らしくない慌しい口調に首を傾げたかったが、俺に近づいてくる人物を見て、緩んでいた意識に改めて気合を入れなおす。
「（悪い、祐希。どうやら今からメインイベントが始まるから、お前はしばらく何も干渉するなよ）」
納得いかないのか、未だに「（ちょっと！）」と頭に直接語りかけてくるが、今はそれどころではない。
俺は自分の下へ近寄ってきた人物、夢野さんに視線を合わせる。
「ごめんなさい、まだお食事中だったかな？」
「いや、俺はこれから食べようとしていたんだ」
それを聞いて、彼女は「良かった」と両手を合わせている。

「なら、これから一緒にお食事しませんか？　飛鳥ちゃんの紹介もしたいですし」
と、満面の笑みで俺に提案してくる。そう笑顔でだ。
昨日、酷い目を受けて泣かされたあいつ等の事を話しているにも関わらず、こんな花が咲き綻ぶような満面の笑みを浮かべる彼女。
普通ならばそんな態度を出来るはずがない。それにも関わらず、こんな笑みを見せてくれる。
そんな彼女の力になりたいと思っている自分がいるが、事態の規模や顛末を知らない部外者に近い俺が力になるのは、まだ先の話し。
なら、俺も彼女を見習ってポーカーフェイスを気取るのが吉だろう。
「そうだね。いやあ、楽しみだな。こう言うの恋の予感って言うの？」
「そうかも知れないね。さしずめ、私は恋のキューピットって感じかな」
「夢野さんのキューピット姿か。そいつは壮絶に似合っているんだろうな」
「そ、そんな事言って煽てても何も出ないからね」
「照れない照れない。では、恋の天使様。どうぞ、私をご指名くださったお嬢様の所までご案内を」
って、ちょっと気取りすぎかな。
あまりの突拍子のない気障っぷりにやりすぎた感が否めなかったが、そんな俺の心配など、彼女が可愛く息を噴出した事で解決される。
「もしかして、緊張してるの？」
あっ、そう言う風に捉えてくれたのか。
「そうなんだよ。柄でもなく、緊張しているみたいだ」
「大丈夫よ。飛鳥ちゃんは一見冷たい印象はあるけど、根は優しいから」
「そうか。夢野さんが言うならそうなんだろうね」

「うん。だから緊張しないでね。……あっ、時間も長くないし少し急ごうか」
気が付けば、今の会話で時計の針が五分も進んでいる。
折角の接触のチャンスを不意に出来る訳もないので、俺は首肯するなり慌てて席を立ち、夢野さんと一緒に教室を出て行った。
夢野さんが言うには、工藤飛鳥は生徒が入れない屋上に居るそうだ。

＊　＊

うちの学園の屋上は生徒の安全面を気遣うと言う理由で出入りが禁止されており、普段は鍵がかけられている。
開錠の魔法で開かない様に認証付きの魔法壁、ファイアーウォールが施されているはずだ。
ファイアーウォールを解除出切るのも学校の教師陣のみ。どんな天才が挑戦しようとも魔力の波長で認証するタイプのファイアーウォールを突破するのは無理かと思ったのだが……。
「実は私、こんな事が出来ちゃうんですよ」
悪戯を思いついた子供のような顔で、ポケットから鉛筆を取り出して「錬成」と呟く。
彼女の言葉に従い、鉛筆の周囲に火花が散ったと思うと、一瞬にして鉛筆が鍵へ形を変えていった。
「錬金術。化学の分野を成り立たせた化学魔法。見るのは初めてだが凄まじいな」
「今の私にはこの程度しか出来ませんけどね」
謙遜する彼女は、生み出した鍵を鍵穴に入れ、ゆっくりと回す。
カチッと開閉の音が聞え、扉が開いた瞬間、最初に俺が目に入ったのは――。
「……遅かったわね、坂本勇気君」

ピンク色のナース服を着ていた工藤飛鳥であった。

第１８話：工藤飛鳥

工藤飛鳥。
先日、俺が偶然目撃した状況の中に居た片割れ。
黒縁眼鏡越しで射抜く様に睨みつける彼女は、この場面に似つかわしくない姿、ナース服――しかもピンク――姿であった。
何故にナースと強く問い質したい所だが、仁王立ちで腕組みする彼女の雰囲気に呑まれない様にするので精一杯だった。
「あら、彩。あなたも来たの？」
「お邪魔だったかな？　けど、二人とも初対面だし、そのゴメンね」
舌を出して手を合わせる夢野さん。
あの出来事を見ていなければ、この二人を仲の良い友人であろうと思ったであろう。
それだけ、今の夢野さんの態度は自然で、彼女達に脅迫されているなんて夢にも思わない態度だ。
「紹介するね、坂本祐希君。飛鳥ちゃんが会いたい会いたいって言っていた男の子」
「ばっ、そんな事は言っていない」
「そうだっけ？」
「愛したいの間違いだ」
……我慢だ、我慢。
いくら目の前で、三文芝居が繰広げられているからってここで俺が取り乱したら、何の為に誘いに乗ったのか分からなくなる。
だから我慢だ。頬を赤らめながら平然と告白まがいな発言をする彼女に、俺は平然としていてはいけない。
相手が演技をしているんだ。こちらもそれ相応の演技を、道化を演じる必要がある。
「え、え、え？　今、この子。途轍もない発言をしなかった？」
動作を大きくし、目を見開き、慌てているかのように声を荒げて

夢野さんに確認をする。
夢野さんは親指を付き立ててサムズアップして返答する。
俺は両手を力一杯強く握り、空に向って拳を振り上げ、可能な限りの声量で言う。
「キタ――――っ！！　俺のターンが。世界が遂に俺の時代に追い付いてきやがった」
……やべぇ。言ったそばで何だが、物凄く穴があったら入りたくなってしまったぞ。
何だよ、来たーって。奇声を上げるにも程があるだろよ。言った本人の俺が思うんだ。当然の如く、俺のバカな叫び声を聞いた二人は――。
「ほら見なさい彩。彼も『俺も愛しているんだぞ』って言ってくれたじゃない」
「いやいやいや。どう聞いたらそんな都合の良い言葉が耳に届くわけ？　確かに滅茶苦茶喜んでいるのは間違いないみたいだけど」
引いていると思ったが、二人はそんな事などお構いなく話しを進めている。
死ぬほど押し寄せて来る羞恥心に耐え、俺は気障っぽく話しかける。
「初めまして、工藤さん」
「飛鳥でいい」
「……はい？」
「飛鳥って呼んで……呼んでください」
「いやいや、そんな頭を下げて頼む様なことじゃないし。いいよ、それぐらい。なら、こっちも下の名前で呼んでよ」
言って直ぐに我に変える。
あぶないあぶない。気が付いたら彼女のペースに巻き込まれている。これでは彼女達を探るなんて事は出来ない。
それとなりに探りを入れたいところではあるが、どうやって切り出す事やら、上手い突破口が思いつかない。

取り合えず、場をつなげる為に、隣で苦笑している夢野さんに向けて話しかける。
「えっと」
「ごめんなさい、もう言う必要はないと思うけど一応ね。彼女が工藤飛鳥ちゃん。私達と同じクラスだから知っていると思ったんだけど、その様子じゃ知らなかったみたいだね」
俺の表情を読取ったのか、そう言ってもう一度苦笑する。
流石に同じクラスメイトの人間を知らない事に気まずさを感じて言い訳の一つでもと考えている際、
「まあ、まだクラス替えしてから間もないし仕方がないかな」
フォローを入れてくれる夢野さん。
そのフォローは名前を覚えていない俺に対してなのか、それとも名前を覚えられていない飛鳥に対してなのかは定かではないが。
改めて俺をご指名した人物、工藤飛鳥を見る。
「えっと……ところで、何故にそんな格好を」
ようやく落ち着いてきたのか、気が回らなかった彼女の格好に対してようやくツッコミを入れる事が出来た。
普通は挨拶なり、色々という言葉があるのではと思ったが、どうしても彼女の格好の方が気になってしまい、そちらを優先させてしまった。
そこで夢野さんも俺が唖然としている理由を知ったのか、三度苦笑いを浮かべ「これは……」と説明しようとすると、
「これが私の勝負服」
と、簡潔に答えてくれたのであった。
「しょ、勝負服？」
「あの、一応説明しますけど魔装衣ですからね」
「あ、ああ。まほういね」
危ない危ない。夢野さんが解説してくれなかったら、勝負服の意味を勝負下着の同義語という意味で捉えていたかも知れない。
俺も男だから、裏に何があるのが分かっても色仕掛けで来られた

ら抗う自信があるなんて断言出来ないからな。
ナース服越しから分かるようにくびれた腰つきに、夢野さんと比べれれば小振りな胸だけでも充分魅力的だというのに、すらっと伸びる脚線の美しさは反則に近い。あれで踏まれたら違う世界が見えるかも知れないな。
しかし、あれが魔法を主に使う魔法闘技で着る魔法の衣、すなわち魔法衣なんて信じられないな。確かに、ここ最近ではネタに走ったかの如く、可愛らしい服装――女性の場合、メイドや浴衣、ドレス――が流行っていると聞くが、ナース服が魔法衣なんて初めて聞いたぞ。
「一応聞くが、何故に魔法衣なんて」
「……これに着替えないと魔法が使えないから」
「は？」
彼女の言葉が完全に理解するよりも早く、飛鳥は隣に居る夢野さんに向けて言う。
「彩」
「うん、分かっているよ」
短いやり取りで話しが伝わったらしく、夢野さんは「じゃあ、後はお若い者同士よろしく」と言ってこの場から去っていく。
反射的に「待て」と言いそうになったが、彼女の立場を考えると何も言えず、そのまま彼女が去るのを見届けるしかなかった。
「さてと」
夢野さんが去ったのを確認した飛鳥の双眸がギラリと光った気がする。
「坂本勇気君」
「な、何だよ」
「私、大切なシーンを覗き見されるのって好きじゃない」
「な、何を言って」
「共感、掛けられているんでしょ」
その言葉に戦慄を覚える。

この女、三文芝居をしている最中、俺に気付かれずに『共感』の魔法が掛けられている事に気付いたのか。
確かに俺は、いつの間にか祐希によって共感を掛けられている。しかも、恐らくまだ継続中だろう。見破られた祐希もきっと驚嘆しているだろう。感情が高ぶると勘が鋭くなるタイプなのか。それとも、何らかの魔法を掛けて見破ったのだろうか。
「……どうやって知った。探知系の魔法を掛けた様子は見られなかったぞ」
「女の秘密よ」
いけしゃあしゃあと。
「それで」
「それで？」
「私のお願いは聞いてくれるのかしら？」
俺の瞳を真っ直ぐ射抜く様に睨んで言う。どうやら俺にではなく、俺に魔法を掛けた祐希に言っているらしい。
「（祐希）」
こんな所でしくじるのは得策ではない。
短く頼むと、祐希から「分かった」と返事が来る。
祐希が魔法を解いたのが分かったのか、飛鳥は「改めて」と口火を切る。
「初めまして、坂本勇気君。私は工藤飛鳥。先ほども言ったように飛鳥と呼んで頂戴ね」
さっきと打って変わって態度が変わる。
穏かな雰囲気を醸し出していた少女が、一変して背筋が凍り付きそうな程の威圧感を感じる。
「……たいした演技力だな。さっきまでのあれは全部演技なのか？」
「演技ですか？　フフフ」
「……何がおかしい」
「演技力なら貴方も負けていないでしょ。さっきのアレは中々面白い見世物でした」

「どう言う意味だ」
「どう言う意味？　そんなこと分かっているくせに。それとも、それが貴方のスタンスなんでしょうか」
計算外だ。まさか、行き成りこっちが事情を知っている事に気付いているとは予想外であった。
何でだ。何で分かった。こいつも檜姉と同じ様に読心術者とでも言うのか。
「その様子では気付いていないようですね。……一つ面白い事を教えましょう」
「面白いことだと」
「はい。私の魔法特性は『視る』です」
「視る？　おい、まさか……」
もし、俺の予想が正しければ、今こいつはとんでもない事を告白した事になる。
だが本当なのか。それはある意味ありえない。もし本当ならば、今まで彼女の存在を気付けなかった訳がない。
だってこいつの魔法のカラクリは――。
「はい、察しの通り私は先天異眼魔症。視るに特化された魔眼使いなんです」
先天異眼魔症。通称、魔眼持ち。
人の特定な場所、眼や髪、両腕に魔力の影響を強く受ける事がある。
それが魔手やら魔眼なんて呼ばれている。
先天的なものが多いため、魔法に必要な詠唱なしでも発言出来るチート要素なんて言われたりもする。
威力が抜群な反面、制御するのが難しいと言われているが、それを完全に制御出来れば並みの人間では太刀打ち出来ない魔法使いになれると保障されるほどだ。
「魔眼使いか。……なるほど。視るに特化された魔眼を持っていれば、俺に魔法が掛けられたかどうかなんて朝飯前か」

視る。どれほどの効能を持ち合わせているかは知らないが、魔眼で視るとなると代表的なもので二つの効能が上げられる。
透視眼。障害物すらもすり抜けて視たいものを見る事が可能な力。
万里眼。どんなに遠い場所でも望遠鏡を使ったかの如く間近で見られる力。
この二つだけでも厄介なのに、恐らく飛鳥は魔力の波長を見る事が可能な力も有しているだろう。そうでなければ俺に共感を掛けられているなんて見抜く事など不可能だ。
「飛鳥。君が優れた魔眼を持っている事は分かった。分かったからこそ分からない事が一つある」
「分からない？　何がですか」
「君ほどの力を持った人がどうして祐希を欲しがる？　まさか、惚れたから自分のものにしたいって独占欲じゃあるまいな」
「独占欲ですか。生憎ですが、私は神藤さんの力に興味があっても彼自身に何の興味もありません」
「祐希の力だと」
「っと、些かお喋りが過ぎたようですね。今日、貴方をお誘いしたのは他でもありません。坂本勇気君、私達の為に一肌脱いでくれませんか？」

第１９話：急展開

「意味が分からない」
俺は飛鳥の単刀直入の言葉に同じように端的に答える。
飛鳥は興味があるのは祐希自信ではなく祐希の力と言った。
と言う事は、結婚騒動云々やら惚れた腫れたの話しに結び付くには少々難しいと思う。
「お前は一肌脱げと言ったが、具体的に俺に何をやらせようとするんだ？」
俺の協力が必要。それは何となくさっきの言葉で感じるが、仮に俺の協力を得たとしても飛鳥達が望んだ結果を助長するような結果は得られないと思う。協力を得たいなら俺よりも沢山の人間が候補に挙げられると思うんだが。
「なに、簡単な話しです。我々の側について神藤さんを説得するだけでいいです」
説得か……。なるほど。力でものを言わせるよりも親しい人間を味方につけて交渉を得ようと言うのか。
確かにその点では俺は最適と言えなくもないか。男の中でそれなりに気楽に話せるのは俺だけだし、そう言う意味では女子生徒に頼むのは困難と言うものだ。アイツを説得するまともな理由がない限り、好意を抱く人物を売るなんて無理だからな。
そう言う意味では女が男の人間を味方にするのは簡単かも知れない。最も、それを言う覚悟があればの話だが……。
俺は考えるそぶりを見せながら、飛鳥に尋ねる。
「二三訊いても良いか？」
「訊いても、答えられないものと答えられるものがありますよ」
「かまわないさ。先ず一つ、俺のメリットだ。親友を裏切る様な事をするんだ、当然の如く俺が協力するだけの魅力的な何かがあるんだろうな？」

その問いに明らかに飛鳥の眼が鋭くなるのを感じる。胸中では「この下種が」とでも思っているのであろう。その態度を見る限り、俺が何を言いたいのか分かっていると見ていいだろう。

今まで悪い意味で無表情、良い意味で冷静な態度を取っていた飛鳥の表情がここに来て崩れる。

怒りに身を任せたいのを必死に堪えて飛鳥は無表情を繕う。

「ええ。貴方が協力した暁には、私を……私達を差し上げます」

言い切った。

正直な所、今のこの状況で聞きたくない言葉を飛鳥は完全に言い切ってしまった。

「飛鳥、それが何を意味しているのか分かっているのか？」

「……覚悟はしています」

思いつめた顔で頷くなよ。

こっちの方が夢野さんの力になろうと決めた覚悟が揺らいでしまうじゃないか。

「じゃあ、二つ目の質問だ。なぜ、夢野さんを巻き込んだ。こうやって俺に直接交渉すればいいだけの話しだろ。彼女を巻き込む理由は何一つないはずだ」

そこが不思議で仕方がなかった。俺に協力を仰ごうが、祐希に近づこうが、夢野さんを巻き込む必然性は全くと言ってないはずだ。

あの時のあの情景を思い出すと、夢野さんは飛鳥ともう一人の女性によって何かを奪われ、それを盾に脅されている。

夢野さんを巻き込むメリットなんてないはずだ。ならば、どうして彼女を脅してまで自分達側に引き込んだのか。

「その質問は私よりも彼女に聞いたほうが良いかも知れませんね」

「何だと？」

刹那、俺が居る場所に影が差す。慌てて振り返ると、獲物を大きく振り被って襲撃する人物が俺の直ぐ目の前にいた。

「なっ！？」

俺の右肩から左脇を両断するかの如く振り下ろした獲物から逃れ

る為に、大きく後方に跳んで回避。
切裂かんと言わんばかりに振り下ろされた獲物は、轟音を上げて床に突き刺さり、襲撃した少女は「チッ」と舌打ちをしながら俺を睨む。
「あんたは」
その襲撃する少女に見覚えがあった。昨日見たばかりだ、見間違えるはずがない。
「紙一重で必ず避けると聞いていたけど、まさか今のを避けるなんて……本当に人間？」
「し、失礼な。大体、こんな所でそんなものを振り回すな！　お前、俺を殺すつもりか！」
ひび割れしている床を見て戦慄を覚えずに居られなかった。回避するだけで精一杯で何を振り回されたか分からなかったが、どうせなら、何で攻撃されたのか知らない方が良かったと今にして思わずに居られなかった。
「雷様か！？　何を思ってそんな棘付き棍棒なんかをチョイスしたんだよ」
何を隠そう彼女の手にある得物は、とてもじゃないが彼女の華奢な腕で持てるとは到底思えないほどの重量兵器に分類される鉄製の棍棒であった。殺傷力の高い鋭利な棘付きの。あんな鈍器なんかで叩かれた日には俺の肉体等ミンチになるのは免れないだろう。
「うるさいわね。男ならこんな些細な事なんて気にしないものよ」
「些細か！？　重量兵器でぶん殴られそうになった事は些細なことか！？」
「ああ、うるさいわね。……彩香、煩いから黙らせてくれないかしら」
彼女の要望の直後、俺の足首を何かで縛り付けられる。
二度目の不意打ちに咄嗟に動こうとするが、両足を封じられた俺はバランスを保つ事が出来ず、仰向けになって倒れてしまう。
「っ！？」

「……ゴメンね、坂本君」
頭上から聞きなれた声が届く。
両足を封じられた為に立ち上がる事が困難な為、断念した俺は唯一動く首だけを動かし声がした方角へ向ける。
「ゆ、夢野さ、ん？」
申し訳なさそうにする夢野さんの顔を見て、俺は「どうして？」と口を開こうとしたが、その言葉を押し止めた。
考えれば、別にありえない話しではない。何らかしらで脅迫されている彼女の事、協力しなければ云々なんて脅して、俺の捕縛を手伝わせたのだろう。
「さあ彩。さっきの坂本勇気君の質問、答えて上げなさい」
「そう、ね。思った以上に頭が切れるみたいだし、もう良いかしら」
飛鳥の言葉の直後、夢野さんの雰囲気が変わる。
可愛らしい女の子と言うイメージが強かった彼女。
普通の女の子と言う印象が強かった少女が双眸を吊り上げ、制服の第一ボタンを外し、ドスの聞いた声で言う。
「変な猿芝居なんかしやがって。おかげでこちらの計画が台無しよ」
「ど、どう言うことだ」
流石にこれは予想外であった。今、自分が置かれている立場が全くと言っていいほど理解出来ない。
数秒の時間を有し、ようやく事の次第を理解出来た俺は、声を荒げて「どういうことだ！？」と言っていた。
「夢野さん、キミは彼女達に脅されていてんじゃないのか！？」
「坂本君が言っているのは、昨日の脅しの事を言っているのかな」
「ああ、あれを視て俺は――」
そう。あれを視て俺は、怒りに感じ夢野さんの何かしらの力になりたいと思っていた。
だからこそ、祐希を説得して協力を得る言質も取ったのに。
「坂本君。今の君なら分かるんじゃないかな？」
「どう言う意味だ」

「考えてもみなよ、私が脅された場所を。普通、あんな場所であんな事をすると思う？」
「それは……」
言われて見るとそうだ。
夢野さんが脅された場所は下駄箱だ。しかも、俺達のクラスの下駄箱の前。
つまり、何時俺が降りて来ても不思議じゃない場所で彼女達はあんな事をしていた。
と、言う事は……。
「まさか」
俺の表情を読取ったのだろう。
夢野さんは「そのまさかよ」と俺の考えている事を助長するかのごとく頷く。
「わたし、こう見ても貴方と一緒で猿芝居が得意なの。知らなかった？」
「……皆目検討も付かなかったさ。こいつは一本取られたな」
もはや笑わずにいられなかった。
まさか、助けようと思っていた子に騙されていたなんてとんだお笑いものだ。
「OK。第二の質問は了解した。んじゃあ、最後の質問だが」
「貴方、自分の立場が分かっていないのかしら」
「……充分理解しているさ。と言うよりもあんた誰？」
脅しのつもりで俺の目の前に棍棒をチラつかせる雷様に今更ながら名を問う。
雷様は「なっ！？」と顔を赤らませ、夢野さんや飛鳥よりも控えめな胸に手を当てる。
「私の事がわかんない？　冗談としては笑えないわね」
「いや、知らないものは知らないし。先日の現場に立ち会わなければ知る機会もなかったんじゃないか？」
まるで私の事は知っていて当然でしょ、と傲慢に近い主張に首を

傾げていると、横から「ぷっ」と息を漏らす声が聞えた。
声主は夢野さんであった。
「男からの知名度はさほど高くないみたいだね、アズサ」
「しょ、しょうがないよ彩。あずちゃんは男よりも男らしい女の子だもの。女の子に人気があるからって、男の子に人気があるとは限らないし」
「う、煩いわね二人とも。これでも一月に一回は男の子からこくられるんだからね、これでも！」
さっきまでシリアスシーンよろしくだったはずなのに、気が付けば女性の恋愛トークに変換されていた。
女三人寄れば姦しいなんていうけど、姦しいと言うよりも騒がしい、と言葉を変えるべきではと思う。
「と、言う訳で私の名は柳田梓よ。これで良いかしら？」
何が良いのかはさておき、取り合えず名前は分かった。
「……了解した。君の事はあずニャんと呼ぶべきか？」
「あ、あずニャ、ん？」
俺の言葉が理解出来なかったのだろう。
言葉を失った彼女が理解するよりも早く、横から本日二度目の「ぷっ」と息を噴出した声が届く。
「あ、あずニャん。プププ」
「よ、よかったねあずちゃん。可愛らしい渾名をつけてもらえて。プププ」
夢野さんと飛鳥は口元を手で押さえてどうにか笑うのを抑えようとしていたが、彼女達のツボを抑えてしまったのかさっきから笑い声がだだ漏れだった。そんな彼女達の反応を見て、ようやく理解した柳田さんの顔全体が赤く染まり、わなわなと肩を震わせ、遂には「うがー」と遠吠えを上げながら二人に襲い掛かる。
「さて、冗談はここまでにして」
「その冗談で私がどんだけ辱められたと思うのよ！」
ぜぇぜぇ、と息を荒げる柳田さん。

実力行使で二人を咎め様と試みたのだが、視るに特化された魔眼使いの飛鳥と錬金の魔法特性を持つ夢野さんを捕らえる事が出来なかった。
柳田さんの魔法特性が何だか分からないが、あの二人と鬼ごっこをするにはあまりにも部が悪いだろう。
「さて、冗談はここまでにして」
「二度言った。しかも、さらっと話しを流された」
無視だ無視。柳田さんの突っ込みに一々反応していたら話しが進まないからな。
「第三の質問がまだだったな。いいかな、夢野さん？」
「どうぞ。最も貴方のことだから、こう訊きたいんじゃないかしら？　祐希に一体何をさせたいのか、って」
「流石だ、話しが早くて助かる。それで、その問いには答えてくれるのかな」
「……いいでしょう。私達が神藤君の力を求める理由は――」

第２０話：天才の参戦

「――その前に、貴方は永続植物隷属と言う病を知っていますか？」

祐希の力が必要な理由を話そうとした夢野さんの質問に俺は「聞いたことがない」と返答した。

夢野さんは「そうですか」と頷いて「では」と言葉を続ける。

「植物人間なら知っていますよね」

「それなら分かるが、さっきの永続植物隷属と一体何の関係があるんだ」

「そうですね。……では、意図的に植物人間と化す魔法があることは……知っていますか？」

言い終わると、夢野さん……いや、三人とも緊張した顔付で俺を見てくる。

まるで俺の返答に幾分かの期待を込めた眼つきに俺は申し訳なさそうに顔を振る。

明らかにがっかりした三人は「そうですか」と声を落とす。

「永続植物隷属。植物人間に強制的にさせる魔法を掛けられた人達の病名です」

植物人間。人は心臓が止まる以外に脳が壊れると死亡扱いにさせられる。

どんなに鼓動が刻んでいたとしても、人間の思考の源である脳が壊れたらそれは人間と呼ぶ事は難しい。

汚い言い方をすると木偶人形と言えなくもない。

「その話しから推測されると、まるで誰かがその強制的に植物人間にさせられたみたいだな」

三人の顔が一変する。琴線に触れてしまったようだ。空気が一気に重くなったのを感じる。

俺の間近に棍棒が突き刺さる。

「……どうやら図星か」

最も機能の師匠の報告から大体の事情は知っているがな。

鬼の形相になりつつある柳田さんを見やり、俺はため息を付きながら言う。

「柳田さんは感情が先走るタイプか。今ので図星だと言っているものだ」

「黙れ。おまえ、自分の立場が分かっていて言っているの」

「立場？　大いに理解しているさ。お前こそ、俺を叩きのめせばどうなるか分からない訳あるまい？」

唯一の交渉役を叩きのめせるはずがない。それが分かっているからこそ、動きを封じられていてもこんな軽口を言えるんだがな。

付け入る隙がなければこんな状況であんな挑発染みた真似をするなんて死期を早めるだけだ。

「ぐぬぬぬっ！」

俺に言い負かされて悔しかったのだろう。

柳田さんはもう一度高々と棍棒を振り上げ、俺に目掛けて振り下ろそうとする。

「……今度は外すなよ」

どうせ牽制の一撃。何を臆する必要があるか。

そんな俺の意図を読み取ったのだろう。「馬鹿にしやがって」と声を凄ませて、俺を睨む双眸に力が籠められる。

今の挑発に我慢の限界が来たってところだろうか。こいつは次の一撃来るな。

「アズサ」

頭に血が上った柳田さんに鶴の一声が届く。その言葉で我に返る柳田さん。

「あんな下手な挑発で簡単に怒らないの」

「ご、ごめんなさい。けど彩、こいつは――」

「事実だし、こっちは一応頼む身なのよ。少しは感情を抑えて頂戴ね」

……なんか非常に複雑な光景だな。

脅され涙を流された相手に上から目線でものを言う。

昨日と違う力の上下関係。今の光景を見ると夢野さんの助けになりたいと思っていた自分が非常に滑稽に思えてならない。

実際、今の自分は道化の何者でもないと自負しているがな。

「さっきの話しで大方理解できた。……お前たち、祐希にその永続植物隷属とやらの魔法効果を取り除いた欲しいって訳だ」

「お察しの通りよ。……あの神藤君の力ならきっと何でも出来ると思う。だから――」

「だから、助けてほしいって訳か。……はぁ」

「何がおかしいのよ」

「全部に決まっているだろ。確かに祐希はみんなが知る通り天才だと思う。魔法に関しては特にだ」
「なら」
「だが、相手が相手だ。魔法は魔法でも人体に関する魔法となると医学的分野に属する。医学的分野を素人が扱えるわけないだろ」
「けど、原因である魔法を取り除くことさえ出来れば」
「なんとでもなると思っているなら大きな間違いだ。人体に関わる魔法に間違った対処を施せば人体にどんな影響を及ぼすか分からない」
「そんなのやってみなくては」
「――分からない、か？　その言葉、妹さんを前にして同じ言葉が言えるのか？」
「っ」

口を閉じる夢野さん。今にも泣き出しそうな顔を下に向け、それ以上口を開かなかった。
震える体。地面を濡らす一粒の滴を目の当たりにして、俺はどうにも居た堪れない気持ちでいっぱいだった。
これでは俺が悪役みたいじゃないか。……彼女たちからしてみれば悪役当然なのかもしれないな。
俺は今日で何度目かわかないほどの大きなため息を一つ付き、ポケットから携帯電話を取り出す。
三人の光を失った視線を一身に浴びながら、三回のコール音で出た相手に向かって端的に述べた。

「あー祐希？　俺だ俺。いや、互いに携帯電話の連絡で俺俺詐欺なんで普通は出来ないだろ。非通知設定にもしていないし。そんな事よりも、大至急屋上に来てくれないか？　いや、愛の告白でも決闘の申込みでもなくって……てかお前、事情はさっきまで共感で見ていただろ。そうそう、その話し。んじゃ、すぐに来てくれよ」

ポチ、と通信を終えて携帯電話をしまう。

「さて、と」

と、話しを続けようとして、いまだに三人とも唖然としている様子に気づく。

さっきまで絶望のどん底に落されたかの如く暗かった雰囲気が一変して、まるでさっきの出来事が理解出来ないと言わんばかりに目を点とさせていた。

「なんだよ。お前たちが言ったんだろ？　祐希の力が必要だって」

「そ、それはそうですけど。なんで？」

「なんで？　そりゃまたおかしな話しをするな、夢野さんや。俺は危険だと話したが、祐希を説得しないなんて話しは一つもしたつもりはなかったはずだが？」

俺の言葉に三人は「なっ！？」と驚愕の声を上げる。

声も反応も全くと言っていいほど同じタイミングだったな。

「まずは様子を見てからだな。出来る出来ないの話しはその後でもいいだろ。……ま、祐希の力を借りる事が出来れば、大半の問題はどうにかなるだろうがな」

「あ、あ……ありがとうございます！」

再び、三人同時にお礼の言葉が発せられる。言葉だけじゃなくお辞儀する動作までほぼ同じタイミングに、思わず「三人とも、非常に仲が良いんだね」と呟いていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　俺が祐希に召集をかけてからものの一分足らずで現れた。しかし、大至急来いと言ったけど、高等魔法と謳われている瞬間移動を使って来るかな普通。
　瞬きした直後に、誰もいない空間に祐希が腕を組んで佇んでいるのを確認したとき、思わず「ぬわっ！？」と素っ頓狂な声を上げてしまったぐらいだ。
　しかも、何を勘違いしたのだろうか、現れるや臨戦態勢に入っている。あのまま黙って見守っていたら、どんな魔法が飛び出した事やら。

「……そうか。大体の事情は理解したよ」
「話しが早くて助かる。……だが、お前らしくもないな。見ろ、後ろの彼女達の怖がりようを」

　事の顛末を話している最中、祐希に睨まれた三人は俺の背中に回り込んでいる。
　さっきまでの威勢はどこへやら。借りてきた猫のように大人しくなっている。激しく身震いしていたが。
「それについてはこちらの早とちりだった。その……ごめんなさい」
「ほら、三人とも。いつまで俺を盾代わりにしているんだよ。確かに、祐希を怒らせるのは大変よろしくないが、普段は女には優しいから安心しろよ」

このままでは話しが進まない。
俺はいつまでも背中に隠れている三人を無理やり祐希と対面するように促し、隠れない様に直ぐ後方へ移動した。
「話しは勇気から聞いたよ。永続植物隷属だっけ？　正直、ボクも初めて聞く症状故、三人を助けてやるなんて確約してあげる事が出来ない」
「……あなたにも不可能な事があるんですか？」
「心外だな夢野さん。ボクだって普通の人間だよ。ボク一人程度の力で成し遂げられる事なんてちっぽけなものだよ」
「……それでも、私達にはあなたの力が必要なんです」
次の瞬間、俺と祐希は大きく目を見開く事になる。
前もって祐希を説得する方法でも考えていたのだろうか。全く同時のタイミングで三人は地面に膝を付けて、三つ指を付いて深々と頭を下げたのだ。
「お願いします！　どうか、天才の力を私達に貸してください！！」
「脅迫をしたかと思ったら今度は土下座かよ。随分と見境ないやりかただな」
皮肉で言った訳ではない。
コロコロと変わる態度にこっちの理解力が付いていけないと言われれば嘘になるが、どんな手段を講じても目的を成し遂げようとする三人の本気がヒシヒシと伝わるから言ったまで。
おっと、関心している場合じゃなかったな。一応、俺も祐希の説得をすると言ってしまったのだ。ここは俺も彼女達の援護をしなくてはならない。
「……確か、師匠は医学の心得もあったよな」

「勇気」
「師匠に見立ててもらって、それから出来る出来ないの判断を下しても遅くないだろ？　可能なら助けてあげればよい。不可能なら可能になりえる手段を俺が探してやる。それではダメか」
「ダメじゃない。ダメじゃないが……妙にこの子達に優しいね、勇気」
「そこで不機嫌そうな顔で不機嫌な声を上げる意味が分からないが……そうかもしれないな。なんでだろうな？」
「ボクに聞くなよ。……まぁ、最初っから勇気のやることに首をツッコムつもりだったし、ボクはいいよ」
「さすがは俺の親友。人間の出来が違うよな」
「お世辞を言っても何も出ないよ」
「さて、祐希の説得はとりあえず終了だな。……良かったな、夢野さん。君たちは億に等しい援軍を手に入れる事に成功したぞ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8663t/

汝にユウキの花束を

2011年9月7日03時17分発行